

豊橋市制施行100周年記念

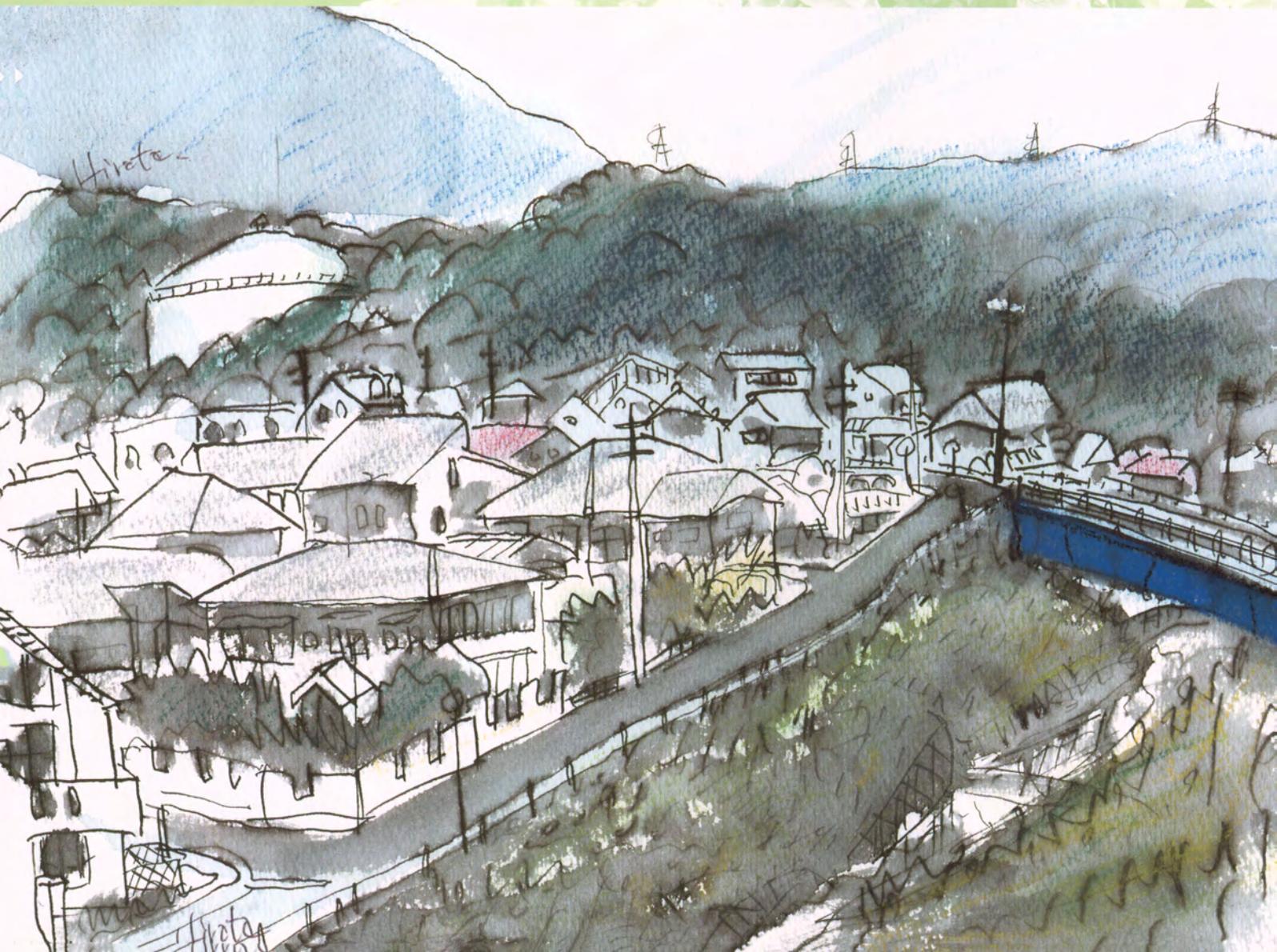
校区のあゆみ

鷹丘

豊橋校区史

11

Takaoka

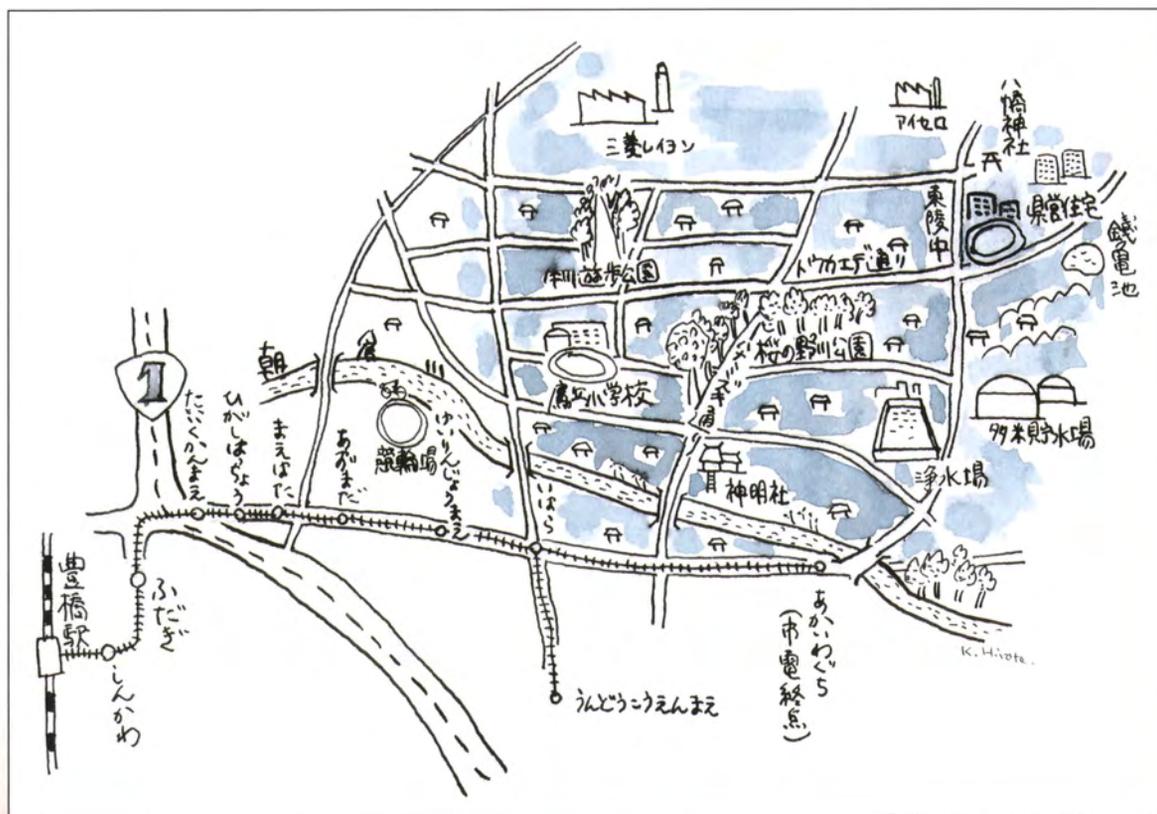






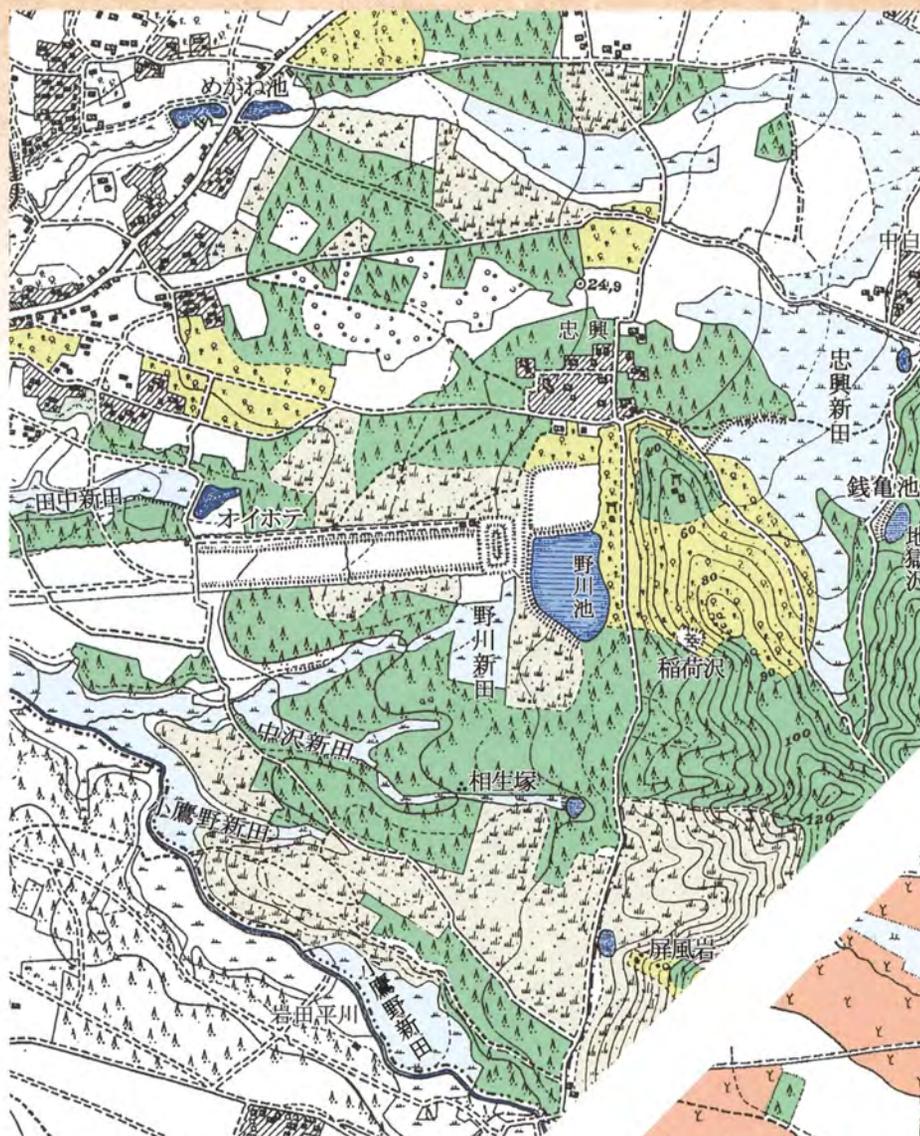
豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ 鷹丘



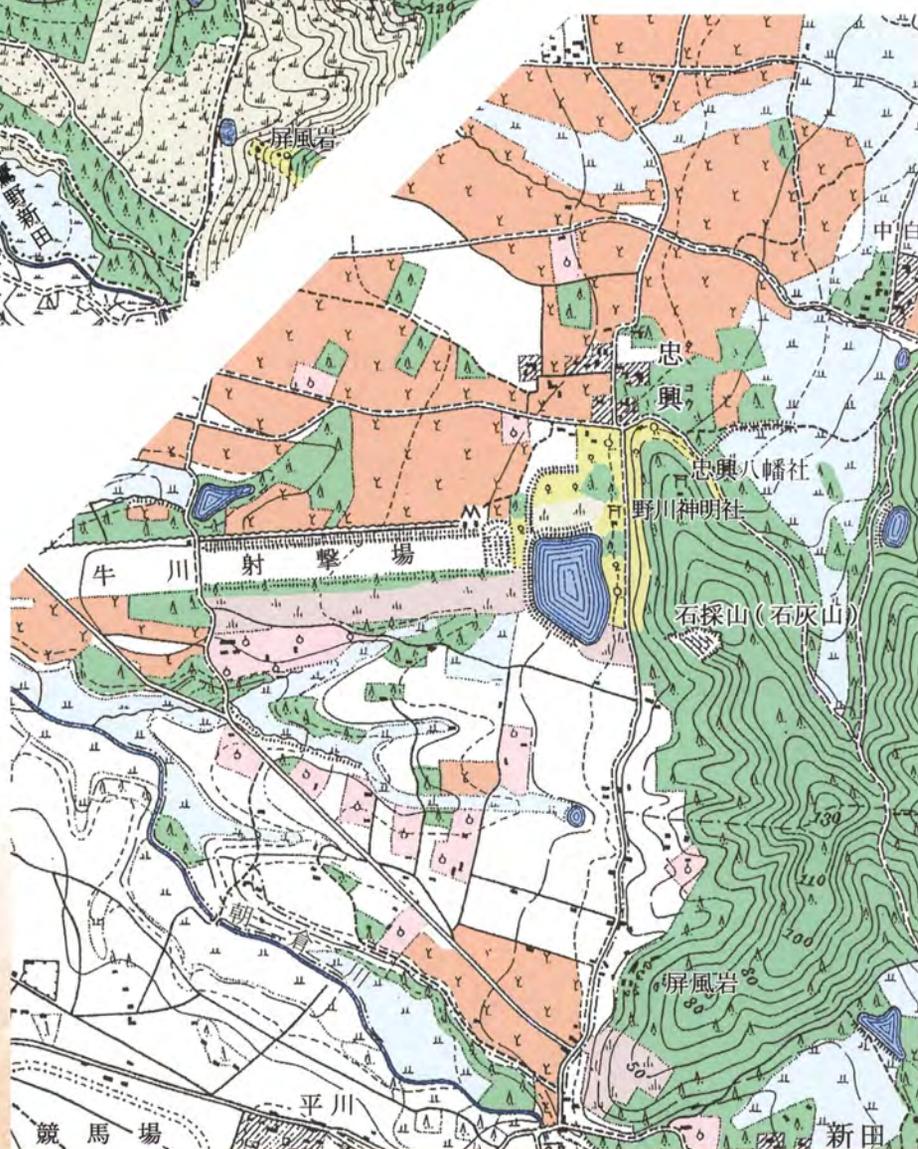
明治23年(1890) 116年前

- ①校区全体が松などの針葉樹、草地などの荒地でおおわれ、低地は江戸時代に新田として開発された。
- ②民家は現在の忠興二丁目付近に十数軒の住宅が見られた。
- ③牛川射撃場は完成しており使用されはじめていた。



昭和2年(1927) 79年前

- ①道も作られ、家も点在するようになった。
- ②忠興三丁目(現 三菱レイオン)、現 東小鷹野一丁目浄水場付近は桑畑となり、養蚕が行なわれていた。浄水場は昭和2年より工事が開始された。
- ③西小鷹野、東小鷹野では梨、柿が栽培された。





鷹丘小学校開校 昭和53年 (1978)



成人式 平成7年 (1995.1.15)



東陵中学校開校 平成9年 (1997)



東陵地区市民館開館 平成10年 (1998)



忠興まつり



鷹丘校区文化祭 平成11年 (1999)



小鷹野まつり



第28回鷹丘校区体育祭 平成17年 (2005)

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
鷹丘校区総代会長

小 野 等

鷹丘校区は昭和53年（1978）牛川校区から分離発足した新しい校区です。

現在のように鷹丘校区が大きな発展を遂げたのは、昭和35年（1960）三菱レイヨンの誘致、更に昭和45年（1970）にかけ諸先輩の方々が、この地の将来を見据え、大規模区画整理という大事業を成し遂げたお陰であり、あらためて敬意を表するものであります。

校区発足当時の人口は2,000世帯余、7,000人余でしたが、急増を続けて、平成17年（2005）世帯数は5,300戸、人口14,100人を超え豊橋でも有数の大校区へ発展しました。

従って、この地で生まれ育った家族は非常に少なく鷹丘地区の故事来歴を知る人は僅かです。

鷹丘校区の歩んできた歴史を知り、鷹丘を第二の故郷として愛する心を育むために今回の校区史作成は、誠に時宜を得た事業であり、意義のあることと思いました。

そこで編集にあたっては、特に次世代を担う小中学生達が「懐かしい故郷鷹丘」として心に残るように、読みやすく、理解し易い「読み物」にするということをコンセプトに執筆、編集しました。ご不満な点もあるかと存じますが、校区の皆様にはご一読下さり、故郷鷹丘を心の片隅に留めて下されば幸甚です。

最後になりましたが、校区史作成にご協力を賜りました方々に厚く御礼申し上げます。

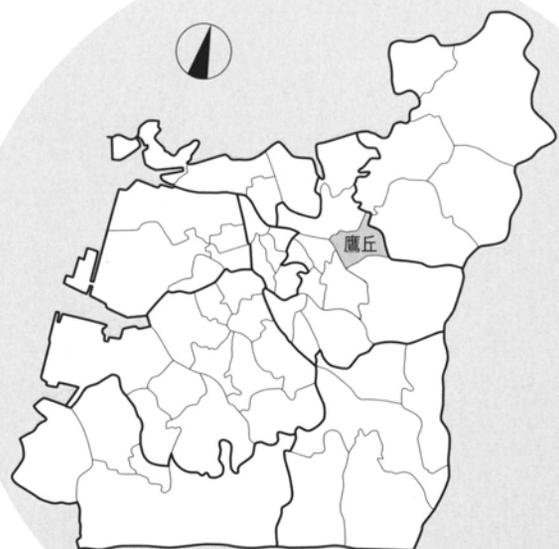
目次

CONTENTS

第1章 自然と環境	7
第2章 歴史と生活	
1 あゆみ	8
(1) 原始時代から中世	8
地形と土地利用	8
牛川人発掘と原人の碑	8
石器を残した人々(旧石器終末期)	8
原始時代の遺跡	9
農耕(稲作)の始まり	9
(2) 近世から現代	9
鷹丘の開発(江戸時代から明治)	9
軍事訓練場	10
軍都豊橋の牛川射撃場	10
第二次大戦の傷跡	11
明治以後の自治の移り変わり	11
小鷹野浄水場の建設	11
県営豊橋浄水場	12
忠興、東西小鷹野の開発(区画整理)	12
緑ヶ丘の開発(区画整理)	12
三菱レイヨンの誘致	13
2 産業	13
(1) 農業の移り変わり	13
(2) 牛川鉱山と乗小路	14
(3) 瓦の製造	15
(4) 工業	15
三菱レイヨン豊橋事業所	15
アイセロ化学株式会社	15
貴城精工株式会社	15
守田光学工業株式会社	15
3 校区のコミュニティー活動	16
(1) 鷹丘校区社会教育委員会	16
(2) 鷹丘民生児童委員協議会	16
(3) 鷹丘校区保護司会	17
(4) 鷹丘校区防犯協会	17
(5) 豊橋市消防団第2方面隊 鷹丘分団	17
(6) 更生保護女性会 鷹丘支部	17
(7) 鷹丘つくし児童育成クラブ	18
(8) 鷹丘校区子ども会	18
(9) 鷹丘校区体育振興会	19
(10) 鷹丘校区遺族会	20
(11) 豊橋身体障害者協会 鷹丘支部	20
(12) 花みずきの会	21
(13) 鷹丘校区老人クラブ	21
(14) 納涼盆おどり	22
第3章 教育と文化	
1 学校教育、保育	23
(1) 鷹丘小学校のあゆみ	23
屋上からのながめ	23
小学校のうつりかわり	23
鷹丘小学校ができるまで	23
鷹丘小学校ができて	24
鷹丘小学校の校名・校章の由来	24
本いっばいの小学校	24
タカオカーニバル	25
緑いっばいの小学校	25
鷹丘小学校PTA活動	26

(2) 東陵中学校のあゆみ	26
東陵祭	28
陽だまりネットワーク	28
星空観望会	29
全校総合学習	29
東陵中学校PTA活動	30
(3) 牛川東保育園	30
2 社会教育	31
(1) 東陵地区市民館	31
(2) 鷹丘校区市民館	31
(3) 鷹丘文化協会	32
3 史跡・文化財	33
(1) 小鷹野神明社	33
(2) 小鷹野まつりと手筒花火	34
(3) 忠興八幡神社	35
(4) 八幡社参集殿の建築	35
(5) 氏子青年会の発足と山車の建造	35
(6) 鎌倉街道	36
校区のみなさんへ	36
鎌倉街道とは?	36
駒止めの桜	37
4 人物・昔話	38
(1) 儒医 今泉立言	38
(2) 狂歌 泉公平(今泉公平)	38
(3) 茶華道の師匠 中村悦次郎	38
(4) 詩人 丸山薫	39
(5) 牛川鉱山 後藤庄五郎	40
(6) 半の木地蔵	40
(7) 半の木の芝居	41
(8) 抜け井戸	41
(9) 廃寺 晴雲寺	41
(10) 龍雲寺	41
厄除一宝観音菩薩	42
(11) 忠興の庚申日待	42
(12) 忠興部落の秋葉代参	42
(13) 諸穴	43
(14) 銭亀池(別称:殿様池)	43
鷹丘校区の街路樹	44
鷹丘の四季(昭和10年代)	45
鷹丘校区の変遷	
(町別自治会総代氏名・加入世帯数)	46
参考文献	47
編集後記	48

校区の位置



表紙: イラスト 平田一彦

市電の終点赤岩口から屏風岩方向多米配水場(通称:水源地)を望む

第1章 自然と環境

鷹丘校区は豊橋市の北東部にあり、東は弓張山系を境に静岡県に、北に石巻校区・玉川校区、西に牛川校区、南に東田校区・岩田校区、南東に多米校区に接している。自然環境に恵まれ、古い洪積時代からこの地域は人の住みやすい所であったと思われる。今から10万年前の人骨が発見された土地でもある。鎌倉時代の1190年頃には京都と鎌倉を結ぶ街道がこの地を通っていた。1223年京都を発って鎌倉に向かった鴨長明（歌人、随筆家）が紀行文『海道記』に書いていた「赤坂一豊河一峰の原一浜名ルート」の峰の原が小鷹野一帯をさしていると言われている。鎌倉時代が終わり、室町時代（1350年代）になると足利一族が三河の守護となり、一族の細川氏がこの地を支配するようになった。忠興の地名は細川忠興からきていると言われている。

1505年牧野古白が今橋城を築き、後の城主が現在のこの地を「鷹狩り場」としたことから小鷹野の地名が生まれたという。1570年頃には朝倉川の南にあった二連木城で戸田氏と武田氏との間に激しい戦いが繰り広げられた。鷹丘一帯もこの戦いの渦に巻き込まれた。

戦国時代が終わり、1600年代になると新田の開発が盛んに行われるようになった。1690年頃には忠興新田や小鷹野新田、1800年頃には野川新田が開発された。しかし東海道の参勤交代が多くなると殿様の荷役に人や馬が動員されこの加重に耐えかねて農地を手放す農民が続出した。そして耕地も元の原野になってしまったという。

鷹丘校区の地形は概ね平坦で、渥美半島の

東岸を太平洋の暖流が流れて暖かい空気を送り込み、弓張山系に囲まれて温暖な気候に恵まれている。平年の降雨量は1,500mm程度で全国平均に比べるとやや少ない。平均気温は15℃前後である。気象上の特徴として、冬季に北西の季節風が吹き「三河のからっ風」と言われている。雪はちらつく程度で積雪することはまれである。

交通の便は豊橋駅まで車で20分程度の距離であり、市電の井原、赤岩口駅までは、東西小鷹野からは徒歩10分、忠興、緑ヶ丘からは25分程度である。豊橋市近在の工業地帯や商業地帯に勤める人々にとって格好のベッドタウンとなっている。また国道1号線岩屋交差点から豊川市に抜けるバイパスも、乗小路峠を貫くトンネル工事が着工されており、緑ヶ丘を通過して東名高速道路へ通行できる日も近くなった。

校区の中心部には東西に長さ1kmの牛川遊歩公園があり、春は花見、夏は緑蔭を楽しむことができる。また、小さな子どもが母親に見守られながら遊具に群れ遊ぶ光景や、四季を通じて朝夕のウォーキングなど、多くの人の姿がみられる。また、大震災に備えての避難場所でもあり、防災器具等が保管されている。

一見住宅が密集しているように見える校区内には梨畑、ブドウ畑、柿畑が散在し、春の花咲く頃には甘い香りに満ち、のどかな田園風景が残る街でもある。

東西1.9km、南北2.4km、面積2.5km²の鷹丘校区は、世帯数が5,300戸、人口14,100人であり、豊橋市で5番目の規模を誇る大きな校区に成長した。

第2章 歴史と生活

1 あゆみ

(1) 原始時代から中世

地形と土地利用

・古生層山地 東南部は、弓張山系で、主峰石巻山から金田山に続き、高山、石採山、八幡山、屏風岩へと、美しくおだやかな山並みとなっている。地質は石灰岩、凝灰岩、粘板岩、珪岩などで、石採山（牛川鉦山）は、全山良質の石灰岩で、文政4年（1821）のころから採取されている。

・洪積層台地 古い時代に豊川の流れて運ばれた砂や礫などが堆積し、その後隆起した台地で、朝倉川や神田川によって削られ、現在の青陵中学校付近を扇の要とする東北に広がる扇状地（牛川校区・鷹丘校区）を洪積台地と呼んでいる。この台地は小川に刻まれた沢や谷が多く、古い時代の遺跡が多く発見されている。

*洪積層台地＝約170万年前から約1万年前の堆積物から成る小規模な台地

牛川人発掘と原人の碑

日本の歴史の曙、日本人の祖先の姿を知る上で極めて貴重な資料となる牛川人（牛川原人）が発見された。

採石場は今では鉦山の役目を終え、宅地に造成されている。原人の骨の発見現場には、公園と原人碑が残されている。

昭和32年（1957）7月採石作業中に発見された数片の化石化した人骨は、当時日本最古の人骨として脚光を浴びた。

東京大学理学部 鈴木尚教授の鑑定を受け、

その後の研究により、この骨は『今から約10万年前、中部洪積世の上部にあたる時代のもので、現代人とはかなり違った特徴を示しており、原人というべきものの上腕骨である。』と発表された。

その後、三ヶ日人同様の新人説から、ナウマン象の子どもの腓骨という説が出るなど、話題を残したが、科学的な根拠に基づくものではなかった。



牛川原人の碑

石器を残した人々〔旧石器終末期〕

今からおよそ1万年前、世界的に寒かった時代が終わり、次第に現代の気候に似た温暖期に推移した。その時代に、東部の忠興・野川あたりで、狩猟に明け暮れていた人々が使っていた石製の道具が発見された。

（木下克巳著『八名郡の先史遺跡』による）

・有舌尖頭器（ゆうぜつせんとうぎ） 石槍の穂先で『発見地は忠興二丁目、同地居住者近藤八郎により採取。同地は牛川累層と呼ばれる洪積層に該当。標高25m、暗灰色、チャート材、石器は中央近くから先端部欠損、残長約6cm、原寸は9cmぐらい』と記録がある。（同上書）

・石核（せっかく、せきかく） 石器をつくる
るとき、原石から剥片や石刃を打ち取った残
りの部分である。

発見地は忠興一丁目（旧野川地内）、道路
工事の際、表土が削り取られて露出し、昭和
初期、牛川小学校児童だった松井育子が採取
した。『ここも洪積層の牛川累層に当たり標
高24m畑地帯。石材は茶褐色、凝灰岩で油じ
みた光沢あり』と記載されている。また、山
の手付近でも発見されている。二つとも1万
年以上前のものであり、旧石器時代末におけ
る人類の生存、生活の証を示すものと考えら
れている。

原始時代の遺跡

・鷹丘校区の縄文遺跡 近世に牛川西側遺跡
で縄文中期の住居跡、弥生末期の浪の上1号
墳で住居跡が発見された。

鷹丘校区内では遺跡は確認されたが住居跡
は知られていない。

オイホテ遺跡（現 牛川遊歩公園北側）

押型文土器片（二片） 縄文早期

水神平式土器片（多数） 縄文晩期

中沢遺跡（現 西小鷹野2丁目付近）

続水神平式土器片 縄文晩期

農耕（稲作）の始まり

紀元前300年のころ、北九州の一角で始め
られた稲作りは、その後およそ100~150年の
間に、伊勢湾周辺一帯にまで広がった。農耕
の跡を示すものとして弥生中期の瓜郷遺跡が
あり、後期には静岡の登呂遺跡がある。

この時代には金属器と弥生式土器が作られ
るようになり、縄文8千年に及ぶ狩猟生活を
終わらせる画期的な農耕、稲作りが開始した。

人々は稲作りの為に、水源地や小川の流域、
低湿地帯を協力して開田した。住居は田どこ
ろに近い台地に移住するなど地縁血縁を合わ
せて、次第に原始の村作りが進められたと考
えられる。

鷹丘校区の水田開発は、稲荷沢付近（牛川
町乗小路）、中沢付近（西小鷹野2丁目付近）、
地獄沢周辺（銭亀池付近）、蟬川（朝倉川筋）
から始まったと考えられる。



刈り取った稲のハザ掛けのようす

・相生塚（あいおいづか 東小鷹野3丁目
2番付近）は稲荷沢、中沢新田の開発支配者
の塚と考えられるが、この付近での住居跡は
確認されていない。



現在の相生塚跡

(2) 近世から現代

鷹丘の開発（江戸時代から明治）

牛川各所の新田は江戸時代の貞享元年
（1684）のころから相次いで開発された。

・忠興新田（83石 現 緑ヶ丘2丁目付近）
忠興村新切検地帳に貞享3年（1686）11月と
あるが、既に正保元年（1644）吉田藩によっ
て開発が進められ、銭亀池が造られた。

・小鷹野新田 (48石 現 東小鷹野1丁目・西小鷹野1丁目 朝倉川沿い) 小鷹野新切検地帳に元禄3年(1690)4月とあり、当地の仁木氏を中心に開発された。

・中沢新田 (41石 現 小鷹野公園、西小鷹野2丁目付近) 牛川最大の古墳である相生塚の周辺で、小鷹野とほぼ同時に開発されたが江戸時代末には荒廃した。

・野川新田 (167石 現 忠興1丁目付近) 野川村新切検地帳に元禄16年(1703)2月とあり、この頃開発され後に荒廃したが、天保7年(1836)、内田初司が藩の許しを得て野川60町歩(約180,000坪)の再開発を始めた。工事も順調に進んだが、内田初司は明治6年(1873)82歳で没した。相続人である内田鶴作は、金田の三ツ口池から水を引き、野川一帯を水田にする計画を立てた。水路や中間の溜池を中白と八幡山の東北に作り、野川に2町歩(約6,000坪)と4町歩(約12,000坪)の溜池(野川池)を作った。しかし明治初期のインフレにより、溜池の工事は進捗したが財政的に破綻した。鶴作は借財の為、折角の土地を手放してしまった。

このように江戸時代初期から中期にかけて新田が開発され、旧牛川村の基礎が固められて明治の夜明けを迎える。

明治時代に入り、低地の新田を除くと、わずかな起伏を持ちながら平坦な台地が広々と続いた原野であった。赤松林、低木、草地、荒地がほとんどを占めた。

*一石=十斗=約150kg(米俵2.5個分)

*検地帳=一筆ごとに田畑の区別・土地の等級・面積・耕作者の名および除地・屋敷地などを一村単位にまとめた土地台帳。検地帳に明記された石高が、農民への年貢賦課や大名への軍役の基準とされていた。当時の収穫高は、田一反について、9斗~1石5斗位であったようである。

現在の農家の収量は、およそ3石6斗位である。当時年貢は収量の5割で、いわゆる5公5民となり、これが地租となっていた。

*一町歩^{ちようぶ}=3,000坪=9,917m²

軍事訓練場

吉田城主松平伊豆守は錬兵に深く意を用い、早くからオランダ式の兵学を研究し、種子島銃や鉄砲などを導入し、藩士に西洋式の訓練を行った。

牛川の田中から先原あたり一帯の野を訓練場とし、藩士たちが隊伍を組んで笛太鼓の楽隊を先頭に勇ましく訓練場に繰り込んだという。薬師の台地から下蟬に向けて種子島銃の実弾射撃を行い、仁連木あたりに番兵を置いて通行止めを行ったという。

また、砲術の研究として、二つ橋(現 三菱レイヨンの野球場付近)に二間四方、高さ一間くらいの台場を設け、木製の太砲を据え屏風岩(現 光生会赤岩病院東)を目標に発砲し、城主自ら検分したこともあったと伝えられている。

二つ橋から、目鏡池の東、半の木あたりを「兵たん野」といい、時にはこの辺りで訓練を行ったこともあったという。

*一間(長さの単位)=1.8182 m

軍都豊橋の牛川射撃場

明治18年(1885)豊橋に鎮台(兵営)が置かれたため、歩兵の射撃訓練をするために造られたのが牛川射撃場である。この地は元々吉田藩の訓練場であり、その跡地が利用された。射撃場の西の端は現在の桜丘高等学校付近にあたり、東西1,200m南北200mの広さであった。中央のところには土手や塚があり、また実弾を射撃した際、回転標的に当たったところがわかる仕組みになっていた。歩兵第18連隊のうち1中隊から2中隊の兵士が毎日のように来て訓練をした。

明治40年（1907）、豊橋に第15師団が置かれた。射撃場も拡張され吉田藩の調練場に沿って南側に東西700m、南北100mの土地を買い上げて拡張されたが、大正の始めのころ拡張部分は廃止になり払い下げて民有地になった。昭和6年（1931）頃になると、旧制中学校（現中学1年から高校2年）の軍事教練場としても使われた。

この射撃場は終戦後、入植者に払い下げとなり、更に区画整理によって昔の面影は残っていない。

第二次大戦の傷跡

戦争も末期の昭和20年（1945）6月20日の未明、豊橋市はB29爆撃機による大空襲に見舞われた。鷹丘校区でも忠興に爆弾が落ち内田国太郎宅が全焼した。また、一丁目付近にあった防空壕入口にも焼夷爆弾が落ち、中にいた数人が亡くなったと言われている。

そのほか今泉宅では玄関先に、周辺の家では刈り終えた麦に火がついたが、消し止められ大事に至らなかったという。また、高山にも火の手が上がったが幼木のため燃え広がらず自然鎮火した。

空襲後の特異な現象として、爆弾を落とされ、大きく掘り起こされた畑を埋め戻したところに作物を作ると、天地替えをしたように作物の生育が大変よかったという話が残っている。

明治以後の自治の移り変わり

明治9年（1876）忠興、小鷹野、中沢、野川、田中、若宮と、浪の上、牛川、暮川が合併して牛川村となり矢野弥次兵衛が戸長となった。

明治39年（1906）7月1日、牛川村と下条村が合併して下川村となった。

昭和7年（1932）9月1日、豊橋市に合併し牛川町となる。

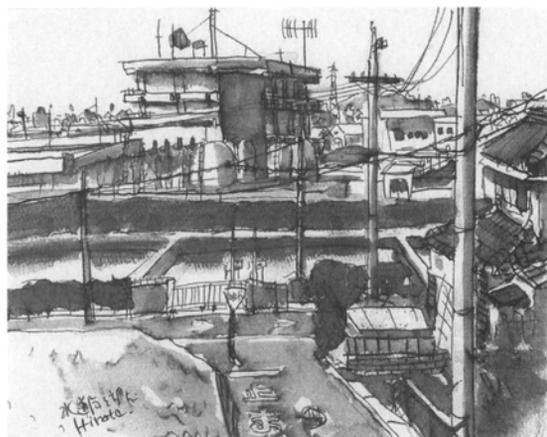
小鷹野浄水場の建設

豊橋の近代化は、昭和恐慌をきっかけに進

められた。その一つが浄水場の建設である。

大正15年（1926）6月30日、水道施設建設の案件が豊橋市会で可決された。総予算は305万8,752円であり、4カ年の計画である。

昭和2年（1927）3月より浄水場用地の買収を始め、4年後には全土地所有者の承諾を得た。同年7月18日、八名郡石巻村大字多米地内（現 豊橋市多米町蟬川）の屏風岩の山上で水道起工式を行った。



東から見た小鷹野浄水場緩速濾過池

昭和4年（1929）4月に工事が完成して通水が開始された。当時の豊橋市の人口は89,000人程であったが、井戸水を使う人が多く給水戸数は2,700戸程であったという。

浄水場の水処理量は25,000 m^3 /日で約20,000世帯の家庭に供給され、現在豊橋市全体のおよそ15%を受け持っている。

下条に取水場があり、豊川の川底に埋めてある直径1.35m長さ304mの穴のあいた管から、1日約2万 m^3 の「伏流水」を集めて3.6km離れた小鷹野浄水場まで送っている。この水は「緩速濾過池」で処理される。現在1,000 m^2 の池が五つあり、池には厚さ80cmの砂と42cmの砂利の層からなる濾過層がある。1日5mのゆっくりとした速度で伏流水を通過させている間、砂の層にいる「微生物」の働きによってきれいな水に変わる。この水は「浄水池」で消毒され、これを屏風岩の山上にある配水

タンクに送られ各戸に給水されている。

県営豊橋浄水場

伸び続ける水需要に対処するため、昭和42年（1967）に小鷹野浄水場の西隣地に急速濾過系の県営浄水場が建設された。東三河地域一体の広域水道の必要性から生まれたもので、昭和45年（1970）には拡張工事が行われた。現在の給水能力は約100,000 m^3 /日で、豊橋市、豊川市、一宮町、新城市に給水している。

水源は新城市大野（旧鳳来町）から取水している豊川用水系（三ツ口池経由）と新城市松原から取水している牟呂用水系（森岡取水場経由）の2系統に分かれる。設備は、着水池（化学薬品処理）→高速沈殿池→高速濾過池→浄水池から成っている。

忠興、東西小鷹野の開発（区画整理）

牛川地内の野川、半の木方面は湿潤で、農地としては不適當な為、関係識者は工場誘致や区画整理による住宅地化の計画を立てた。



東陵中学校より校区中心部を望む

昭和30年（1955）に、豊川用水事業の具体化に伴い発足した、開発研究会（会長 石川彦作）では、豊川用水受け入れについて検討したが、当地（現忠興、東西小鷹野）は住宅地とすべきだとの意見に一致し豊川用水の受益地をあきらめた。

昭和26年（1951）に小鷹野住宅36戸、昭和30年（1955）に新小鷹野住宅16戸、昭和33年

（1958）に忠興分譲住宅が建設され、昭和34年（1959）忠興市営住宅40戸が建設された。

同年、豊橋市は、工場誘致を前提とした市施行の区画整理を行いたいという意向を開発研究会に示した。

市は区画整理事業に対し、調査研究に努め、数回にわたって説明会を催した。また地元では準備委員会（会長 山口善一）を設け、施行面積868,210 m^2 にまたがる関係地主1,116人の同意を得た。この区画整理は豊橋市施行の戦災復興の区画整理に匹敵する大事業であった。

事業計画は整理前の戸数438戸、人口2,660人に対し、整理後は8,150戸、人口32,600人であり、用地は住宅地域57%、準工業地域15%、工業地域28%、公園15箇所31,897 m^2 、その他学校用地6,600 m^2 、総工費7億1,400万円、事業年度5カ年である。昭和37年（1962）2月8日、愛知県知事の認可を得て工事に着手するに至った。

区画整理事業の認可にともなう市条例による区画整理審議会委員の選挙が昭和37年（1962）に行われた。審議会は20人の委員によって構成され、会長は石川彦作が選任された。同年12月7日より9回にわたる仮換地を指定し昭和45年（1970）6月9日換地を終了した。

当初の事業計画後、物価上昇による工事費や物件補償費の問題に関連して、計画および工期の変更を2回にわたり行った。昭和53年（1978）3月16日換地処分について愛知県知事の認可を得て、町名、町界の変更が実施された。

総工費16億円、16年間の年月を経て高級住宅地に変貌をした。現在では各所に公園があり、小学校、中学校も整備され、地区・校区市民館が文化活動の中心となった。

緑ヶ丘の開発（区画整理）

区画整理以前は田畑や、山林であったこの

地域は、豊橋市の水道拡張計画に関連して区画整理をすることになった。

市の水道計画は、豊川用水の貯水池である三ツ口池を水源とし、小鷹野浄水場まで導水管を布設する案であった。そのため関係地主に対し用地買収の交渉があった。そこで関係地主と銭亀池の水利関係者がその対策を協議した。



乗小路地内

この地域は、市施行の区画整理区域に接続し弓張山系の山すそには都市計画街路（東三河環状線）等の計画があり、いずれ区画整理が施行される区域であった。この際これを前提として、水道拡張事業に協力することで

協議会の意見が一致した。

関係地主109人、全員の同意を得て区画整理組合の設置認可を申請し、昭和42年（1967）7月26日認可を得た。同年8月21日に組合設立総会を開催、理事長に石川彦作が選ばれた。組合の地区は現在の緑ヶ丘一丁目及び2丁目で東は東三河環状線、南は都市計画街路下地牛川線、西は乗小路峠の通じる忠興八幡神社東側の旧道、北は金田地区との境界であり、面積は220,000m²であった。

地域内は、住居が一戸も無いので住宅化を促進する為に公営住宅の誘致を図った。そして19,215m²の保留地を県に売却し、県営牛川住宅9棟（鉄筋5階建380戸）が建設された。区画整理地に公営住宅を建設することは県下最初のことと注目を浴びた。その他の保留地

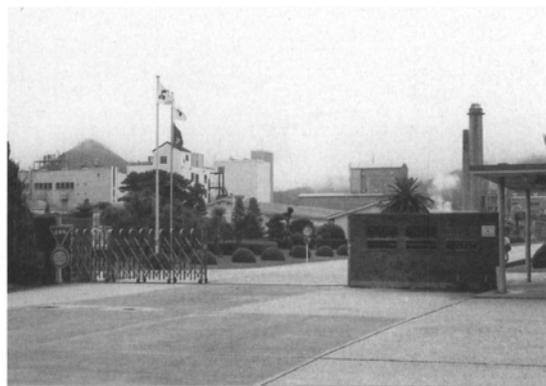
は、1カ年以内に家屋を建てる条件の土地と一般保留地に分けて昭和43年度中に処分した。

公園を2箇所に配置し、うち1箇所は北設の田口高校から県木のハナノキの分譲を受けこれをシンボルとして「花の木公園」と命名した。同時に区画整理事業等の記念碑も建立した。この事業は1億6,000万円の事業費と、4年の年月を経た。そして昭和47年（1972）7月10日、換地処分が完了し、昭和52年（1977）、町名は「緑ヶ丘」に変更された。区画整理後は道路も整備されて緑の環境に恵まれた住宅地となった。

三菱レイヨンの誘致

牛川地区開発のための区画整理事業は、地元の要望である工場誘致を条件とし、関係地主の同意を得て進められた。

その際三菱レイヨンから打診があり、数次の折衝を重ね、昭和35年（1960）11月8日工場敷地14万坪に関する契約を締結した。



昭和36年（1961）9月、豊橋工場建設工事に着手した。また、地元より多数の従業員を採用し、昭和37年（1962）11月に三菱レイヨンは操業を開始した。

2 産業

(1) 農業の移り変わり

江戸時代から明治の初期にかけて低地は新田に開発され、稲作をしていた。畑地には綿、

豆、きび、あわ、さつま芋を栽培していたが、畑地は少なく殆どが荒地であった。

当時現金収入が少ない中、唯一の産業として、明治15年(1882)頃から養蚕が広まり、盛んになるにつれ、さつまいも畑は桑畑に変わり、荒地も開墾され桑畑になっていった。

蚕の盛食期になると、多くの家庭では寝る所もないほど蚕の給餌となる桑の葉を部屋いっぱい広げ、不眠不休で養蚕を行った。

養蚕が盛んになるにつれ桑苗の需要が高まり、接ぎ木による桑苗を自給するようになった。また、これを副業にする人も増加し、桑苗の産地としても知られるようになった。県内から長野県、遠くは関東方面まで大正から昭和にかけて出荷され、年間生産高は120万本に達した。

第一次大戦後の大正7年(1918)天然絹糸が高値のため、大正末期ごろ人造絹糸が発達してきた。しかし、昭和初期にアメリカが絹糸の輸入制限を行ったことで、繭の価格が下落し米に比べて養蚕は有利な副業ではなくなった。

養蚕の不況対策として果樹栽培を行う農家も多くなった。鷹丘校区の果樹栽培では梨の栽培が最も古く、明治40年(1907)頃小鷹野の尾川栄作が安城から梨の成木を運んで植えたのが初めてである。梨の栽培はその周辺に広まったが病虫害の防除を怠り廃園になったものが多かった。

柿の栽培が奨励されたのは昭和の始めで、青年篤農家に約20町歩(約60,000坪)の柿園を作らせ、時の村長矢野宗治らが次郎柿の栽培を始めた。しかし、昭和30年代の区画整理により大幅に減反した。

また、昭和10年代、忠興2丁目の田中家で当時としては斬新な温室栽培が行われた。延面積396m²(120坪)の大きなガラス張りの温室で、菊を中心に時にはメロンも栽培されて

いた。戦時中は中断したが、戦後再開された。

戦後の昭和28年(1953)頃より新興の果樹として葡萄(巨峰)の栽培が行われるようになった。昭和40年(1965)頃から昭和63年(1988)頃までは右肩上がりの生産であったが、平成に入り減少していった。

(2) 牛川鉦山と乗小路

文政4年(1821)吉田藩主松平信順が小鷹野で鷹狩をした時、放った鷹が止まったと言われている岩が石灰岩である。この石灰岩に目をつけた藩主は嵩山の後藤家に牛川で石灰を焼くように命じた。そこで、後藤氏は水運の便利な洗島へ引っ越して開業した。

吉田藩では石灰役所を設け厳しく品質の管理に当たった。生産した石灰は江戸(江戸城修理用)や大坂方面に送られた。積出場所は現在の牛川渡船場の下手で後藤河岸といわれ、百石船が出入りしていた。

明治になって廃藩後は、後藤氏が石灰山と石灰製造の施設を譲り受け自家営業となった。第2次大戦中になると、軍需産業に直結していないという理由で、燃料の石炭の配給も少なくなり、一般の需要も減ったため一時休業の状態となった。

昭和31年(1956)田原の小野田セメントが工場拡張により、石灰石の供給を休業中の牛川鉦山に求めてきた。牛川鉦山株式会社社長西郷氏は山主の後藤庄五郎と砕石契約を結び、近代施設によって操業を再開した。石灰石をダンパー5台で毎日田原工場へ運搬し、1カ月の生産高は4,000tに達した。ところが、田原町(現田原市)では白谷の開削工事でその一帯に石灰岩層が発見され、小野田セメントは近くで石灰岩を入手することができるようになった。

このような事情と牛川鉦山の埋蔵量の限界もあり、昭和45年(1970)鉦業採掘権を梅藤

石材有限会社へ譲渡した。同社は引き続き砕石を行っていたが、昭和53年（1978）に閉山し、宇佐美土地開発株式会社が土地を譲り受けた。その後、宅地造成工事が行われ現在地名が牛川町乗小路となり、150戸を越す高台の住宅地に変貌した。

(3) 瓦の製造

明治維新の頃（1868）現在の忠興三丁目と東森岡の付近に、西三河の高浜から瓦職人が移り住んできた。材料の瓦土は忠興二丁目から三丁目周辺より掘り出した。また、燃料は半の木の林（現三菱レイヨン北側周辺）より切り出した松が中心であった。良質の瓦がで、戦前は校区の屋根瓦は殆どこれで葺いたといわれたが、現在は衰滅して当時の形跡は見当たらない。

(4) 工業

忠興の北部は準工業地帯で様々な産業に関係する会社が多く存在している。区画整理が行われた、昭和20～30年代にスタートした企業を紹介する。

三菱レイヨン豊橋事業所

昭和37年（1962）に工場が建設され、今年で44年経過した。三菱レイヨンは「最高の質を追求し、人々の豊かな生活に貢献する」という理念を掲げ、独自性と優位性を併せもった企業グループを目指して努力している。

敷地面積 462,810m² 従業員数 1,100名

◇ 生產品目 ◇

ポリエステル長繊維（衣料）
ポリプロピレン長繊維（カーペット）
炭素繊維（航空宇宙、産業資材）
アクリルフィルム（建材）
多孔質中空糸膜（浄水器）
エンジニアリングプラスチック（電子部品）

アイセロ化学株式会社

昭和8年（1933）包装材料であるセロハンに着目し、ミスズセロファン商会を設立した。名古屋市や豊橋市（前田町）で工場を建設し生産をしてきたが、昭和42年（1967）に現在の石巻工場を建設した。昭和52年（1977）に本社機構、生産拠点を石巻工場に集約した。

アイセロの経営理念は、

「どこにもないオリジナリティのある製品を生み出してこそ企業の存在価値がある」
「ちいさな市場で日本一世界一を目指す」
である。

自社技術、自社開発を伝統とするアイセロ化学は、持ち前の技術力を生かして、他社とは違うユニークな製品を次々と生み出している。

敷地面積 38,360m² 従業員数 約470名

◇ 生產品目 ◇

各種包装フィルム
高機能性フィルム（防錆、静電気シールド）
高純度薬品用ブロー容器

貴城精工株式会社

昭和28年（1953）の設立で、50年来一貫して未来を指向し、開発に取り組んできた。精巧な歯車の生産に努力し、活力ある企業を築くため、蓄積されたノウハウに新たな技術を加え、高精度、高品質の要望に対応してきた。今後も開発力の充実、生産技術力、管理力の向上に努力して行く。

敷地面積 4,209m² 従業員数 55名

◇ 生產品目 ◇

二輪、四輪用オイルポンプギヤ
ミッションギヤ
スピードメーターギヤ
各種小型歯車等

守田光学工業株式会社

昭和26年（1951）守田光学レンズ製作所を創業した。鈴木光学にてレンズ、プリズムの

加工技術を学んだ守田 晴（現会長）は、その技術を生かして豊橋市八町通りで、双眼鏡用のプリズムの生産に着手した。

昭和37年（1962）受注の大幅増加に対応するため、蟬川に工場を新設移転した。昭和53年（1978）日本光学（ニコン）と取引を開始、昭和55年（1980）ニコン協力事業共同組合に加入した。

小ロット生産に対応するため、製造工程の見直し、薄膜技術の開発等ユーザーの多岐にわたる要望に応えるべく努力している。

敷地面積 3,265m² 従業員数 50名

◇ 生産品目 ◇

顕微鏡、望遠鏡、双眼鏡

測量機

光学機器に使用されている光学ガラス部品（プリズム）医療機器等

3 校区のコミュニティー活動

鷹丘校区では様々なコミュニティー活動が活発に展開されている。その活動状況を紹介する。

(1) 鷹丘校区社会教育委員会

各町から選出された16名の委員と校区総代会より推薦された会長、女性部代表の計18名で編成されている。校区社教委員の役割は

- ・地域のコミュニティー活動の推進
- ・地域住民の生涯学習・文化・社会教育活動の振興
- ・20歳を迎える若者を祝福し、希望と勇気を与え励ます成人式の開催

その中でも生涯で一度しか体験できない「成人式」については細心の注意を払った計画・運営を行っている。以前は校区から祝ってもらう受け身的な成人式であったが、近年では可能な限り「自らが主体的な成人式」に

なるよう計画・運営に配慮している。毎年、他校区からの参加者も含め170～200名の新成人が鷹丘校区から誕生している。豊橋市の中でも5番以内に入る大世帯の成人式を校区総代会理事と共に実施している。

(2) 鷹丘民生児童委員協議会

高齢化社会の到来や、社会秩序の悪化が叫ばれている中での子どもたちの安全確保等、地域民生児童委員協議会に対する期待は大きい。

昭和53年（1978）鷹丘校区の誕生と同時に発足した。委員は厚生大臣から委嘱され「民生委員法」によって定められた非常勤の特別職公務員である。現在委員は男性6名、女性12名の計18名（民生16名、児童2名）で構成されている。それぞれ担当エリアを受け持っている。

一人暮らしや、寝たきり老人宅の訪問、市の福祉課との連絡、鷹丘児童育成クラブや鷹丘身障会と協力して温かみのある福祉活動を進めている。しかし、東海大地震などの大災害が発生したときを考えると不安が残る。

日常生活の中で近隣愛が芽生え、お互いに助け合っていく絆が必要であろう。今、鷹丘校区では見守りボランティア活動を推進している。

隣近所の老人住まいで

- ・新聞が新聞受けに何日分もたまっている。
- ・雨戸が何日も閉まっている。
- ・夜になっても電気がつかない。
- ・最近姿を見かけない。

等のことに気付いたら、民生委員への連絡をしていただける、近隣の応援体制が必要である。



鷹丘小学校 東側

(3) 鷹丘校区保護司会

保護司の使命は、社会奉仕の精神を持って罪を犯した人たちの改善と更生を助けることと、犯罪の予防のための知識と理解を深めることに努めて、公共の福祉事業に少しでも寄与することである。

保護司は法務大臣から委嘱された非常勤の公務員で、地域から選ばれた社会奉仕者である。犯罪が社会環境の中で生まれ、犯罪者の更生もまた社会環境の中で得られるものである。犯罪者の更生活動や、犯罪の予防活動は保護司の重要な任務である。個人的な情報等や人間関係に触れる点が多いので大変苦勞をしている。校区内には3名の保護司がおり、犯罪のない町、また社会を明るくするための運動に努めている。

(4) 鷹丘校区防犯協会

最近、鷹丘校区では空き巣や、自転車盗、車上狙い、自動車部品盗等が多発傾向にあり、またひったくりや子どもの連れ去り未遂事件も発生している。このような犯罪を防ぐには個人で防犯対策を行うだけでは十分とは言えない。地域の人たちが結束し、「自分たちの街は自分たちで守る」という意識を持つことがより効果的である。そこで鷹丘校区では犯罪者に「ここでの犯行は無理だ」と思わせる

ために、各家庭の玄関等に「みんなで灯す明るいまち夜間点灯中」というシールを貼り出す「一軒一灯」運動を推進している。また平成17年(2005)2月に豊橋警察署長から鷹丘校区内における防犯パトロールの委嘱を受け、「鷹丘校区防犯パトロール隊」を設置し、青色回転灯を装備した自動車による防犯パトロールを実施している。

防犯パトロールは義務的なものではなく、校区内に住む人たちが「自分たちの街は自分たちで守る」という自主防犯意識を持って「安全で安心して暮らせる地域社会」の実現を目指すものである。

(5) 豊橋市消防団第2方面隊 鷹丘分団

消防団は消防法に基づく豊橋市の公的な消防機関で、地域の有志の方々によって組織された団体である。消防団員の身分は、特別職の地方公務員であり、正業に従事しながら火災等の災害や地震、風水害等に対し昼夜を問わず迅速に活動を行う。

また台風接近のときや、秋祭り等には警戒活動も行っている。日頃から地域のボランティア活動にも積極的に参加し地域に密着した活動を行っている。

平成11年(1999)9月に豊橋市で発生した竜巻災害では、消防団員の災害支援活動が地域から高い評価を受けた。定期的な防災訓練や放水訓練をして緊急時の対応に備えている。こうした活動はボランティア精神と、より良い人間関係が必要で、その醸成を常に心掛けている。また、最近^{じょうせい}は自家営業の人が少なくなり団員確保が難しくなっている。

(6) 更生保護女性会 鷹丘支部

当会は「更生保護」に協力するボランティア団体である。

- ・地域に活動の基盤を据え

- ・人間愛と限りない情熱をもって
- ・誰もが人間らしく、生き生きと暮らせる社会づくり

を推進するのが当会の活動で、豊橋市には50の支部があり、鷹丘支部は20名の会員で成り立っている。忠興6名、東小鷹野1・2丁目4名、東小鷹野3・4丁目4名、西小鷹野5名、緑ヶ丘1名である。毎月第2木曜日、10時半から正午まで保護司と一緒に校区市民館で意見交換をしている。



活動として、毎月15日の夕方に校区パトロールを実施、犯罪のない明るい社会作りに努めている。その他校区行事のお手伝いや、豊橋市全体の行事への参加をしている。

- ・いきいきフェスタ
- ・善意銀行チャリティバザー
- ・赤い羽根共同募金
- ・豊橋まつり
- ・歳末助け合い募金

等の行事に交替で参加している。

(7) 鷹丘つくし児童育成クラブ

「ただいま～」「おかえり～」と元気な子どもたちの声が響きわたり、「鷹丘つくし児童育成クラブ」の一日がスタートする。1年生から6年生までの子どもたちが授業後、指導員と一緒に楽しく遊んだり勉強したりして兄弟のように過ごしている。つくしクラブは働く父母により自主的に運営されている児童

保育所である。

昭和53年（1978）に牛川団地内の集会所を借りて42人でスタートした。人数も増え、施設の都合などにより、その後5箇所ほど場所を移ったが平成10年（1998）に西小鷹野2丁目に移ってきた。平成17年（2005）4月現在、開所当時は予想もつかない90世帯、103名という市内で1、2位を競う大規模クラブになった。今の施設での今後の保育や、受け入れに課題を残している。



年間の活動は新一年生の歓迎会から始まり、夏はお泊まり会、ドッジボール大会、秋にはフリーマーケットや運動会と盛りだくさんの行事がある。それぞれ父母が係りを分担し、打ち合わせや準備会の進行をしている。また、毎年町内の「530運動」に合わせて、施設の周りの草取りやどぶさらいも行う。平成17年度はグラウンドに土を入れるなどの整備も行った。これからも、子どもたちが安全で元気で過ごせるように、役員をはじめ父母全員で地域への貢献も考えながら頑張っている。

(8) 鷹丘校区子ども会

子ども会は、昭和52年（1977）に活動を開始した。西小鷹野、東小鷹野1・2丁目、東小鷹野3・4丁目、忠興、緑ヶ丘の5町が集まり活動している。6月にはソフトボール、フットベースボール大会を開催し、優勝チームがブロック大会、市の大会へと進んでいく。

10月には写生、書道大会を行い、優秀作品は校区文化祭と東陵地区市民館まつりに展示している。冬に行うクリスマス大会は500人近い子どもが集まって、半日かけて体育館を飾りつけ、ゲームをして一日を楽しく過ごしている。2月にはドッジビー大会を開催している。豊橋まつりでは4年ごとにブロック代表として大人、子どもが一緒になってみこしを作りパレードに参加している。過去には羽を動かせる巨大な鷹や、長さ20mもある竜を作って練り歩いたこともあった。これからも子どもたちを温かく見守っていく子ども会活動を続けていきたい。

(9) 鷹丘校区体育振興会

強い鷹丘

校区の体育祭も平成17年（2005）で28回を迎えた。スポーツの盛んな鷹丘校区は、市の大会でもその力を発揮し、輝かしい成績を上げている。昭和63年（1988）には市のスポーツフェスタ軟式野球大会で優勝し、平成9年（1997）には女子バレーボールが豊橋市スポーツ祭中央大会で優勝した。平成11年（1999）には男子バレーボールも同中央大会で優勝している。その他シニアソフトボール大会（壮年ソフト時代を含めて）では多くのゾーンで優勝を飾っている。女子バレーボール大会（家庭婦人バレーボール時代を含めて）でも多くのゾーン優勝と上位入賞を果たしている。また陸上競技大会での入賞経験もある。校区代表ではないが、クラブチームの優秀な成績も多く見受けられる。

新しい競技種目の普及を目指して

スポーツ人口の拡大やスポーツの振興を促すためには、新しいスポーツと取り組みやすいスポーツの普及が欠かせないものと考えている。体育振興会では常に受け入れられる競技種目の普及に努めてきた。平成元年（1989）

ソフトボールを取り入れ、今でも校区で盛んに楽しまれ校区競技大会の種目になった。平成5年（1993）キックベースを校区球技大会に取り入れた。平成11年（1999）ドッジビーを校区体育祭に取り入れており、子どもたちに人気のある競技種目となっている。平成13年（2001）ミニテニスを採用し、今ではサークルも結成され、17年度からは体育振興会に所属した。また校区体育事業等をPRすることを目的として、昭和61年度から、『鷹丘スポーツ』を発刊し現在まで引き継がれている。

総合型地域スポーツ活動

平成15年（2003）8月17日、東陵地区市民館にて多くの来賓を迎え、総合型地域スポーツクラブであるRYOZ^{リョウゾ}スポーツクラブが誕生した。平成13年（2001）11月に設立された豊橋市の南部地域で活動しているFINSスポーツクラブに次いで豊橋市で2番目に設立された。

総合型スポーツクラブ（以下「クラブ」という）は広域、多種目、多世代、多数の競技レベルが揃い、多数の人がスポーツを楽しむことを目的として設立されたものであり、少人数、単一種目である従来型のクラブとは活動目的の違ったクラブである。このようなクラブは豊橋市の生涯スポーツ推進計画の柱として取り上げられており、これから普及させていくものである。

クラブ設立については、平成14年（2002）4月から検討に入り、平成15年（2003）2月設立準備委員会を発足、以降設立に向けて具体的な活動を活発化させた。

活動地域は東陵、青陵地区であり、二つの“陵”からクラブは「RYOZ」と命名され、冒頭にあるように平成15年8月の設立総会を経て同年9月28日クラブの拠点である牛川地区体育館で活動を開始した。初年度は期間が短

いこともあって期末会員数は84名だった。第2期から積極的な入会勧誘を展開したことや地域の方々に理解されてきた等の要因もあって、会員数は徐々に増加し、平成17年(2005)末には1,000名(休会者を含む)に達した。また、スポーツ人口の拡大を図るため、クラブ内でのサークル活動の推進を図っている。現在35サークルが登録所属し、活発に活動している。総合型地域スポーツクラブがこの地域に確実に根付く日も近いとみられている。

(10) 鷹丘校区遺族会

昭和25年(1950)に戦没者英霊の顕彰と遺族の福祉を目的に、豊橋市遺族会が発足した。六十余年前国家存亡の危機に際し、家族や妻



戦没者忠魂碑

子を残して炎熱酷暑の南方へ、また酷寒零下の北辺へ、あるいは本土の守りに若い尊い命を国に捧げられた英霊に、毎年市公会堂において豊橋市戦没者追悼式を行っている。

また秋には牛川小学校北側にある忠魂碑にて、下条、牛川、鷹丘三校区の合同慰霊祭を行っている。祖国の平和と繁栄を念じ散華された英霊に対し追悼感謝の誠を尽くすことは、今の私たちの当然の責務と考えている人は多い。今日の平和と繁栄は、先人の尊い犠牲の上にあることを忘れてはならない。平成17年(2005)6月27日天皇、皇后両陛下が太平洋戦争で多くの命が失われたサイパン島を訪問され慰霊された。両陛下の平和を希求する思いが、戦後60年という節目の年にその足跡をはじめて海外に刻まれ「遺族として涙が出るほど嬉しかった。」

との感慨が寄せられている。同会より「私たちはこれからも末永く平和な日本であるために慰霊追悼をしていきたい。」との希望も寄せられている。

(11) 豊橋身体障害者協会 鷹丘支部

鷹丘身障者会は昭和46年(1971)頃東部ブロック身障者会に加入していたが、鷹丘校区の発足以来、鷹丘身障会として新たにスタートした。校区から各種団体に認められ、いろいろな活動を行っている。

会員数は豊橋身体障害者協会で430名で、そのうち鷹丘身障会は現在33名である。会員



はどどこかに障害を持っており、障害の重い人、軽い人、それぞれ自分の持つ能力を最大限に発揮して障害を克服し社会参加する為に日々がんばって過ごしている。

津具村・鷹丘校区交流会

鷹丘身障会の年間行事として、重度障害者の慰問、日帰り研修旅行、津具村障害者団体との交流会、総会、新年会、上部団体の豊橋身体障害者協会主催の行事への参加等を実施している。また、東田校区の東田身障会と合同で、会員自ら出資して平成16年(2004)8月に東小鷹野4丁目16番地22に「障害者福祉の店マグネット」をオープンした。

豊橋市には9カ所に障害者民間施設小規模作業所があり、そのうち6カ所の施設の手作り品、善意銀行の一品寄付等の商品を販売している。また南信州の名産物とマグネット特製の手作りコンニャク、会員からの一品寄付なども販売し、企業や農家からも協力をいただいで運営している。

マグネットでは会員と地域の皆さんとコミュニケーションを図るため、生のコーヒー豆から入れた美味しいホットコーヒーや、夏にはかき氷などのサービスを行っている。営業日は、水曜日から日曜日までの週5日である。近くに来られたら、黄色いカンバン、黄色いコンテナを目印に気軽に立ち寄って頂きたい。

(12) 花みずきの会

昭和63年(1988)6月、鷹丘校区の女性の親睦と交流を図ることを目的として創立された。

年間の主な行事として、奉仕活動では街路樹「ハナミズキ」の除草、清掃、管理の作業を年間8～10回実施し、福祉活動ではアルミ缶、牛乳パックの回収を行い、市社会福祉協議会を通じて月一回施設に寄付している。

また、研修旅行や料理教室を年1～2回実施して親睦をはかっている。

これらの活動実績が認められて各種の認定や表彰を受けた。

- ・平成3年(1991)8月豊橋みどりの協会街路樹愛護会第1号に認定され、豊橋市長より街路樹美化で感謝状を受けた。
- ・平成10年(1998)4月全国「みどりの愛護」の集いにて功労者建設大臣表彰を受けた。
- ・平成15年(2003)8月豊橋市社会福祉銅有功賞を受賞した。



会員による街路樹「ハナミズキ」の除草作業

(13) 鷹丘校区老人クラブ

校区老人クラブは各町毎に次の名称でそれぞれの活動を続けている。

(町名)	(クラブ名称)
東小鷹野一・二丁目	東美鷹クラブ
東小鷹野三・四丁目	小鷹野クラブ
西小鷹野	鷹美会
忠	忠興絆クラブ

65歳以上が総人口に占める割合は20%に達しているが、最近では老人クラブに入る人は減少傾向にある。魅力がない、年寄りの仲間に入るには抵抗がある、などいろいろ理由がある。多様化の時代で、一面では自立する高齢者の生き方が現れているが、人間は人の間と書く。みんなの中に入って話し合い、助け合っていくことが大切である。

「定年になったらOB会や趣味グループも結構だが先ず近くに同年代の仲間を作ることが良い」…と先輩高齢者の言である。

各クラブとも新しい時代の高齢者像を求め、生涯学習や、地域社会参加に努めているが地域の皆さんのご意見も希望している。敬老の日に詠まれた会員の歌がある。

敬老は考老なりと一日を

一善為して古希の道往く

地域の中へ

奉仕…公園清掃、花壇管理、交通安全

一声運動、朝倉川清掃、雑巾寄贈他

仲間と…例会、旅行、お花見会他

健康で…グランドゴルフ、幼稚園児や三世代交流スポーツ、ニュースポーツ体験、花フェスタ参加他

各クラブへは概ね60歳以上であれば入会でき、諸活動への参加は自由である。



朝倉川 清掃作業

(14) 納涼盆おどり

「盆おどり」は「秋祭り」と共に、鷹丘校区の伝統的行事である。また、新興住宅地である忠興、小鷹野、緑ヶ丘の親たちが「ふれあい」と子どもたちの思い出としての「ふるさと」を創ろうと熱く深い思いで行って来た。

昭和56年（1981）鷹丘音頭が作られ、8月16日には小学校校庭で盛大に披露された。作詞は近藤信夫、作曲は清水能子、唄・振付は鷹丘民踊同好会である。以後盆おどりのプログラムに鷹丘音頭が加えられることとなった。

平成9年（1997）8月23日鷹丘校区創立20周年記念「納涼親子盆おどり大会」が校区総代会及び各町成年会の協力により鷹丘小学校グラウンドで開催され、20周年を祝った。またこの記念親睦会には本家の牛川校区総代会役員を招待し、お互いに20年のあゆみを語り合った。



鷹丘の「はたち」となりし慶びを
親子で踊る盆おどりかな

東小鷹野1・2丁目は小鷹野神明社境内で行われていたが、現在は蟬川公園で行われている。東小鷹野3・4丁目は中沢公園で行われていたこともあったが、現在は野川公園で行われている。いずれも成年会と共催している。西小鷹野は小鷹野公園で西友会と共催で行われている。いずれも子どもたちへのイベントで「籤引き」「輪投げ」など催され踊りと共に定着している。

県営牛川住宅（通称：緑ヶ丘団地）では団地内公園で行われ、踊り、カラオケ、屋台が併設されている。外国人住民の参加もあり団地まつりの様相である。

忠興町の盆おどりは、昭和48年頃より忠興婦人部主催で元公民館広場（現 牛川東保育園）で開催された。それ以前に龍雲寺で行われたこともあった。会場の中央に立てられた青竹を提灯などで飾り、それを踊りの輪で囲んでいた。踊り子、お囃子は婦人部が中心に行った。曲目は炭坑節、ちぎり音頭、のんほい節、豊橋音頭、鬼まつり等であった。

いつの時期からか花の木公園に変わり、その後八幡神社境内に移り現在に至った。八幡太鼓グループのお囃子、文協舞踊部の先導で賑やかな盆おどりが行われるようになった。

鷹丘音頭

一 東の山から朝日が昇る
町の息吹に人々の
かわす言葉もさわやかに
山の緑にこだまする
サテ 鷹丘よいとこ明るい町だよ
さあさ みんなで手をつなごう
明るい輪をつくろう

二 古墳跡から歴史をしのぶ
ここは千古のむかしより
住まいし人も数多く
誇りは高しふるさとよ
サテ 鷹丘よいとこ住みよい町だよ
さあさ みんなで手をつなごう
住みよい輪をつくろう

三 朝倉川からきこえる流れ
かおりただよう梨の花
公園の緑もあざやかに
心なごます美しさ
サテ 鷹丘よいとこきれいな町だよ
さあさ みんなで手をつなごう
きれいな輪をつくろう

四 市民館から文化のひかり
おとしよりから子どもまで
集う心はみなひとつ
未来に向かう町づくり
サテ 鷹丘よいとこ伸びゆく町だよ
さあさ みんなで手をつなごう
伸びゆく輪をつくろう

第3章 教育と文化

1 学校教育、保育

(1) 鷹丘小学校のあゆみ

屋上からのながめ

鷹丘小学校は、校区のほぼ中央からやや西よりのところに位置している。北は、なし畑や東西に長い公園があり、その向こうには大きな工場の建物が見える。東には、たくさんの住宅があり、山の中腹にまで広がっているのがわかる。南に目をうつすと東から西にかけて、土地がだんだん低くなっており、朝倉川をへだてて豊橋市の中心を望むことができる。

小学校のうつりかわり

鷹丘小学校は、昭和53年（1978）に牛川小学校から分かれてできた新しい学校である。牛川小学校の児童数が増加し、過大校となったために新設された。一方、牛川小学校は創立以来100年を越す、古い歴史をもった学校である。

鷹丘小学校ができるまで

明治5年（1872）の学制発布以前の庶民の教育は、寺小屋や私塾で行われていた。牛川校区でも、浪の上の正円寺（1680年開設）や牛川北郷の正太寺（1763年開設）で古くから寺小屋が開かれていた。これらの教育が学制発布による牛川学校設立のもとになったといえるだろう。

牛川小学校の創立は、明治6年（1873）10月12日のことである。正式の名前は、第二大学区、第九中学区、第四十二番小学、牛川学校といい、創立当時は正太寺の仮堂を使用し

ていた。学区は牛川村と、多米・赤岩を含めた地域で先生は二人しかいなかった。そして、明治7年（1874）に多米学校が分かれて以来、約100年間、校名の変更はあったが、学区はほとんどかわらなかった。

創立以来、お寺を借りての授業が続けられていたが、明治14年（1881）、ついに現在の牛川小学校の場所に校舎がつくられた。途中何回かの建てかえや校区の拡張をくりかえしながら、牛川小学校110年の歴史が刻まれてきたのである。

児童数の変化をみると、明治40年（1907）に140名、その後大体5年で50名ほどずつ増えた。第二次世界大戦後も少しずつ増え続け、昭和35年（1960）には、13学級、600名あまりになった。そして、三菱レイヨンができ、区画整理が進み家が建つようになると、増加も急激になった。昭和45年（1970）ごろには、1,000名を越す市内有数の過大校になった。そのため、毎年校舎の増築がくりかえされ、体育館やプールもりっぱにでき上がった。この間、昭和47年（1972）には、創立100周年の記念式典が行われた。

昭和52年（1977）には、35学級、1,450名とふくれ上がり、運動場にプレハブの教室を建ててしのぐほどになった。こうしたことから、市では牛川町字オイホテ（現西小鷹野三丁目七番地）の地に小学校を建設することになった。小学校の中町・北町・南町・東町・洗島・若宮の各通学団区域は牛川小学校に、忠興・小鷹野・緑ヶ丘の各通学団区域は鷹丘小学校に通うことになったのである。この年の

12月には、2つの学校のお別れ会があり、お互いがんばることを誓い合った。

鷹丘小学校ができて

昭和53年（1978）4月1日、鷹丘小学校は市内44番目の小学校として誕生した。多くの人々の願いと努力、そして市の大きな力添えで、私たちの鷹丘小学校ができたのである。こうして、かつてのさびしい農村は、新しい学校と家々が建ち並ぶ新興住宅地として生まれ変わったのである。



鷹丘小学校建設予定地



現在の鷹丘小学校

鷹丘小学校の建設費は、6億2,000万円、校地は1,887㎡である。開校時は、21学級、821名で、職員の数は30名（学校長 稲橋麻実）だった。

その後、児童数が年々増えてきて、校舎が増築された。また、開校から3年の間に、プール・校歌などもできた。そして、先生方やPTAのみなさん、卒業していった先輩たち

が力を合わせて、現在のような花や木々でおおわれた美しい学校をつくってきたのである。

このようなりっぱな施設の整った美しい学校で、図書館、集会、体育などの活動に大きな成果を上げてきた。

鷹丘小学校の校名・校章の由来

鷹丘小学校の校名を決める際は、地元の人たちから校名案をつのり、選定協議会で話し合われた。当初、公募などから候補にあがった校名には次のようなものがあった。

小鷹野小、東丘小、東小、東野小、緑小鷹丘小

最終的に小鷹野の「鷹」と緑ヶ丘の「丘」をとり、地形も丘陵地帯であることから「鷹丘」小にまとまったのである。また、鷹は古来より優駿（非常にすぐれていること）な鳥として愛されてきた。そこから、子どもたちが賢く、優駿に育ってほしいという願いも込められている。

校章は、タ・カ・丘の三文字を組み合わせ、抱負を秘める鷹の勇姿をあらわしている。



鷹丘小学校の校章

本いっぱい的小学校

鷹丘小学校の蔵書数は、平成17年（2005）で7,400冊以上である。図書館は、教室を2部屋使っている。第一図書館は、読み物の図書を中心に揃えており「ゆめの森」という名前で親しまれている。第二図書館では、学習関係の図書が置かれており、「ちえの森」と呼ばれている。



ゆめの森



ちえの森

鷹丘小学校では、平成12年度より学校司書が配置され、「人のいる図書館」に向けて動き始めた。週2日（1日4時間）という時間の制約はあるものの、本と子どもを結ぶ架け橋である学校司書によって、学校図書館は大きく変貌を遂げた。学校司書の働きもあって、図書表示の工夫、展示・掲示の工夫や蔵書の充実などがめざましく行われた。また、地域のお母さんたちが本の読み聞かせを定期的に行ってくれたり、司書によるパネルシアターが催されたりするなど、子どもと本の架け橋となるような催しごとが積極的になされている。

タカオカーニバル

鷹丘小学校の行事の中で最も特色があるものといえばタカオカーニバルである。タカオカーニバルとは、運営委員（児童会）が中心となって、子どもたちの力で国づくり（出し

物）の準備、発表をする鷹丘小学校のお祭りである。毎年、3年生から6年生までの各クラスがユニークな国づくりをしている。例えば平成17年度では、1,500本以上のペットボトルを使ってトンネルを作ったクラスや、教室を利用しておばけやしきや忍者やしきを行ったクラスもあった。毎年、地域に住む多くの方々がタカオカーニバルを見にやってくる。子どもたちが趣向を凝らして作り上げた国を見て、子どもの創造力や日頃の学習活動の成果を知ることができるのである。また、PTAの方々の積極的な参加もあり、地域社会を巻き込んだイベントになっている。



バイオハザード（おばけやしき）



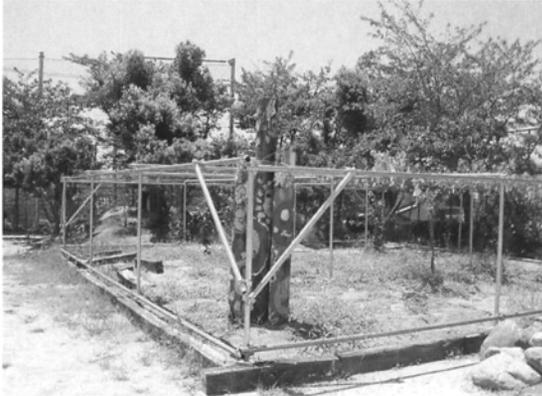
けん玉を教わる子どもたち

緑いっぱい的小学校

鷹丘小学校には、1年を通してたくさんの花が咲いている。園芸の先生や園芸委員会の子供たちが毎日花の世話をしているので、花壇がとても整っている。

また、平成16年度には、校庭や中庭にカキ

ヤナシ、ブドウなど実のなる木を植え、「タカオカフルーツランド」をつくった。植樹式では、全校生徒が集まり、早く収穫できることを祈った。



タカオカフルーツランド

鷹丘小学校PTA活動

日々の活動については、各学年より選出された委員が中心となって行っている。この委員によって事業部、厚生部、広報部、学年部の各部会が構成されて、役員部と共に運営委員会および総会に図りながら年間の様々な事業を行っている。



鷹丘バザール

実際の事業については、子どもの安全の為に登校時交通当番の実施。鷹丘文庫や運動会、音楽会など、子どもたちの学校生活の充実を図るための教育活動の貴重な資金となるバザー、資源回収の実施。学校、地域社会、諸団体への情報伝達の役割を担う広報誌「たかおか」や「学年だより」等の発行、運動会の手

伝いなどがある。また、近年では防災のために会員が校舎の窓ガラスに飛散防止フィルムを貼ったり、全児童に防犯ブザーを配布、「こども110番の家」マップの作成などの防犯対策も行っている。防災防犯については、地域との連携が以前にも増して必要となっている。

(2) 東陵中学校のあゆみ

東陵中学校の校舎は弓張山系の先端に位置している。以前よりこの地は、石灰岩が多いため、セメントの原料として古くから採掘されていた。地元の人たちからは「イシバイ山」と呼ばれており、壁のように切り立った山から発破（爆薬）の音がよく響いていた。

昭和45年（1970）頃（地図A）は近くにまだ民家が少ない。地図中の筋の多く並んだ場所は、切り立った断崖を表している。採石の場所がこれによりよくわかる。

昭和37年（1962）から牛川区画整理事業が始まり、団地の建設や三菱レイヨンの招致、町名・町界の変更や公園づくり、道路建設などが精力的に推進され、この地域の活況が図られた。区画整理の完了する昭和53年（1978）には急激に増えた人口のため、鷹丘小学校が開設された。採掘場も山を閉じ、跡地は宅地開発された。



地図A 昭和45年（1970）

平成2年(1990)の地図(地図B)から、多くの民家が建ち並び、道路も整備された様子が分かる。

青陵中学校が全国有数のマンモス校(一時は生徒数2,000人を突破)となり、その解消に向けて新設校を設置することになった。候補地の中から現在地が選ばれたが、いざ建設しようとする、岩盤が硬く、民家が接近しているため爆薬が使用できず、かなり難航した。1年間工事が遅延したのもそのためである。



地図B 平成2年(1990)

地図Cは平成2年(1990)の地図を一部修正したものだが、他の2枚と比べると、地形の移り変わりがよく分かる。



地図C 平成9年(地図は平成2年を利用)

東陵中学校は、総事業費約63億円で着工し、平成9年(1997)4月3日、開校式が行われ、豊橋で22番目の中学校として誕生した。

中学校校舎は通常、三、四階建てだが、東陵中学校は、高台にあり、周辺が住宅地とな

っているため豊橋市内で唯一、二階建ての校舎となった。また、中庭の地下に貯水槽(約400トン)を設置し、校舎屋上からの雨水を集め、散水やトイレの洗浄水などに利用している。

外壁は一階がクリーム色、二階がオレンジ色、体育館の屋根は緑色など、これまでの中学校にはないカラフルな色づかいをしている。管理棟の切妻や、ドームのような体育館の屋根も目を引く。



正門



校舎



中庭(ガウディ広場)

壁面には、おしゃれなモザイク画がはめ込まれている。コの字型校舎の中庭はベンチやモニュメントが置かれた憩いの広場である。

屋上にはプールがあり、別棟の二階建て体育館の一階は、柔剣道場とピロティである。校舎内には、木仕上げの多目的スペースや吹き抜けがあり、廊下もゆったりして、明るい。

校名は、日の出る方角と春を示す「東」と、大きな丘、「乗り越える」を意味する「陵」から採用した。次代を担う生徒が自己の才能を芽吹かせ、立ち昇る朝日のように輝かせ、どんな困難にも乗り越えて成長することを願っている。

校章は、TOHRYOのTとRを基にデザインされている。青色のラインは、学校(SCHOOL)のSとCを表し、色彩は、広々とした丘陵、大地を緑色で表現している。生徒が力いっぱい未来に羽をはばたかせ、山を越えて飛び立つ「希望の鳥」を光り輝く銀色で表している。



校章

東陵祭

東陵中学校の行事の中心として、東陵祭がある。平成16年度までは、「体育祭・合唱祭・文化祭」の三祭の総称だった。

平成17年度からは、合唱祭は合唱コンクールとして6月に実施するようになり、「体育祭・文化祭」の二祭を合わせて東陵祭とすることになった。

体育祭は、各学年4学級という本校の特色を生かし、1年から3年まで合わせた学級団

対抗で競う。そのため、異学年との交流が深まり、よい伝統を築いている。中でも「応援合戦」は、各団の工夫を凝らした演技で、来校した方々に喜んでもらっている。



体育祭での綱引き

文化祭は、「体験アワー」「学級アワー」「ステージアワー」「エンディング」という4つのプログラムの編成で行っている。例年、多くの方々に観てもらっている。



文化祭体験アワー

陽だまりネットワーク

平成16年度も多くの生徒がスタッフとして参加した。行事の前には企画・運営について、何回かのスタッフ会議が開催される。

このスタッフ会議は、生徒代表と保護者、地域の方々との合同で開催される。特に3年生は1年生の時からスタッフとして活動している生徒が多く、大人たちとの話し合いにも積極的に意見を述べ、子どもも大人も楽しめる企画を練っている。

平成16年度の「陽だまりネット夏」は5つの講座(ドッジボール大会・夏のお菓子作

り・ビーズで作ろう携帯ストラップ・優しい手話・国産大豆から豆腐を作ろう)を開設した。会のあとには、地域の祭りで行われている和太鼓の演奏をかき氷を食べながら聴いたり、実際に演奏を体験するなどして交流を深めた。「陽だまりネット冬」は4つの講座(フットサル・クリスマスケーキ作り・羽子板で作るお正月飾り)を開設し、その後餅つき大会をして交流を深めた。

17年度は33名の生徒スタッフでスタートした。「夏の陽だまり」では6つの講座(ドッジビー大会・ビーズで作ろう携帯ストラップ・手作りお菓子・手引き教室・ソフトボール大会・ギター教室)を行い、前年度好評だったかき氷大会も実施した。

この「陽だまり」ではドッジビー大会、手引き教室、ソフトボール大会を講師の人に頼らないで生徒が講師となって実施することができた。年3回実施した「陽だまり」にはそれぞれ約100~150名ほどの参加があった。

この「陽だまり」を楽しみにしてくれている地域の人も多く、参加してくれる人もスタッフの生徒も共に楽しめる会になってきている。

星空観望会

市内で最も見晴らしがよいと評判の本校ならではの行事で、平成9年(1997)の開校時に購入した2台の天体望遠鏡を使い、開校以来、夏と冬の2回天体観測を行っている。



星空観望会 火星観測のようす

今では、生徒はもちろん地域の方々や親子で参加される方も多数いる。

全校総合学習

「東陵校区をグレードアップさせよう」を大テーマに、「福祉」・「朝倉川自然」・「社会環境」・「校区文化」の4コースに分かれ、学年の枠を越えた班づくりを行い、総合的な学習を行っている。

・福祉コース 老人会とのグランドゴルフ大会に加え、お年寄りと給食を一緒に食べ、懇談の場を持つなどふれあい活動を行った。また、募金活動で集めたお金で車椅子を購入し、地域の人に貸し出しも始めた。その他に、障害をもつ方への支援活動も行っている。

・朝倉川自然コース 校区の山川を中心に自然の状況を調査し、校区民が憩える環境づくりのために活動をしている。特に、朝倉川をホテルが舞う川にするための活動には、たくさんの生徒がかかわっている。

・社会環境コース 自分たちで学習を深めるだけでなく、積極的に地域の人たちに情報を流し、集めた募金で防災グッズを購入し、東陵地区市民館に配備した。また、街路樹の植え込みに花の苗を植え、地域の公園の清掃や花壇づくりを行い、積極的な学習を行った。



地域清掃のようす

・校区文化コース 牛川原人や鎌倉街道、その他東陵校区にかかわる歴史を調べ、広報活動を行った。校区の祭りを盛り上げるために校区民と協力して活動を進め、校区への理解

と愛着を深めるための積極的な活動をしている。

東陵中学校PTA活動

東陵中学校のPTAは、平成9年（1997）4月の開校と同時に発足し、平成18年（2006）で10年目を迎えた。活力に満ち、様々な活動に積極的に取り組んでいこうとしている。発足以来続く主な活動としては、

- ・資源回収
- ・ふれあいバザー
（平成15年度までは一品寄付即売会）
- ・PTA新聞の発行
- ・校区内パトロール
- ・給食懇談会
- ・料理教室
- ・交通安全運動、あいさつ運動
- ・体育祭、文化祭への協力

などを行ってきた。また平成15年度からは中学生が主体となり地域の人々と共に学ぼうという目的で始まった「陽だまりネット」にも協力している。

東陵中学PTAはまだ歴史が浅く、特色を十分出すには至っていない。今後は新たな企画を模索し、活動を充実させて行きたい。

また中学生の教育と福祉増進の柱の一本となり、更には地域社会の核の一つとなれるよう活動実績を積み上げ、伝統を築いていきたい。

(3) 牛川東保育園

牛川東保育園は昭和48年（1973）に開設された。豊橋市には公立の保育園は5カ所あり、その中でも牛川東保育園は平成17年（2005）では園児180名、職員36名の大きな保育園である。敷地面積1,000坪、建屋延面積156坪、耐震鉄筋コンクリート造二階建てである。

忠興八幡神社の境内に隣接し、鎮守の森に囲まれ山歩きが楽しめる。近くには牛川遊歩

公園があり、田や畑の緑に囲まれて、子どもを遊び育てるには素晴らしい環境に恵まれている。



0才児から5才児までを受け持ち、「心身ともに健康で思いやりを持ち、よく遊ぶ子どもを育てる」をモットーに職員一同ががんばっている。その他、牛川東保育園の特色を以下に記す。

- ・健康づくりの一環として藁ぞうりの使用を実施してきたが、近年は安全面を考えて室内で使用している。
- ・高山学園や地域の高齢者との交流を通じて、優しさや相手を思いやる気持ちを育みながら地域に根ざした保育園を目指している。
- ・「にここ広場」もすっかり定着した。毎月第2・4木曜（10：00～11：30）の間、在園児ではない子どもさんに園を開放して、庭で遊んだり、遊戯室コーナーで遊びを楽しんだりし、おしゃべり会も開いている。更には子育て相談を受けて支援する地域活動もしている。
- ・豊橋市内においては外国籍の子どもが増えてきているが、当園でもブラジルをはじめとして外国籍の子ども入園が見られるようになった。
- ・最近では、延長保育、障害児保育、地域交流保育等の新規事業にも積極的に取り組んでいる。

- ・父母の会では、会員相互の協力により園児の福祉向上に寄与することを目的に、誕生会、運動会、クリスマス会、人形劇上演援助等を通じて積極的に参加している。

2 社会教育

(1) 東陵地区市民館

鷹丘校区の東陵地区市民館は平成10年(1998)4月に、地域住民の文化活動、生涯活動、コミュニティーセンターの場として開館した。



市民館の立地は、市域が一望できる東部丘陵に位置し、市内でも充実した設備と環境を備えた市民館である。

利用状況は、右肩上がり(来館者数4,000~6,000名/月)の状況である。図書の貸し出し状況、健康器具の利用、大・中集会室、図書談話室の利用率はきわめて高く、校区内外から利用者があり、評価も高い。

○「学びの場」としての地区市民館

成人者対象の講座と乳幼児を対象とした親子の講座がある。

- ・高齢者セミナー
教養を高める講座、健康増進を図る試み
- ・市民館講座
教養を高める歴史講座、趣味を深める講座、絵手紙、ガラス絵など

・家庭教育講座

幼児ふれあい教室、子育て教室など

○「仲間づくりの場」としての市民館

設立当時より、自主サークルの活動の場所として、毎月40余グループの利用がある。趣味の充実、心身のリフレッシュ、健康増進的なもの等がある。

市民館祭りは、例年11月第2週(土・日)に市民館利用サークルの芸能、作品の発表会が盛大に開かれている。

○「輝く自分づくり」としての市民館

会館当時より地域のニーズも多様化し、社会のIT化も進んできている。市民館は、社会ニーズを果敢に取り入れ、市民の一人ひとりが輝き、心も身体も健康でより豊かな人生をおくるために活動してきた。それは、運営努力の賜物である。歴代の館長は初代野澤利允、山口栄次、平松英樹らに続き、市民館活動の重要性は益々大きいものになっている。

(2) 鷹丘校区市民館

昭和55年(1980)に鷹丘校区市民館は鷹丘小学校開校に2年遅れて開設された。総代会長を運営委員長として各種団体会長、小中学校教頭で構成されている。

運営の目的は、教育、文化に関する各種事業を行い、住民の教養及び健康の増進、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することである。

利用するグループの内容は、健康体操、ダンス、音楽、舞踊、書道など趣味の関係、子ども関係、自治会活動の会議など多岐にわたり、1カ月20~30団体の利用がある。和室、集会室の利用人数は1,200~1,300名、来館者(図書利用者含む)は1,800~2,400名ほどである。使用頻度は高く予約に繁忙をきたす程の状況である。

管理主事は月~土13:00~18:00(12月~

1月は12:30~17:30)の開館時に常駐している。災害時の防災無線(市役所防災課とオンライン)の管理に携わるなど多岐の業務を担っている。

(3) 鷹丘文化協会

鷹丘校区誕生当初より文化協会設立の気運は高く、三輪徹、星野廣、石川正章などの尽力のもと、昭和56年(1981)4月1日の総代会で設立準備予算が計上された。

同年11月29日鷹丘校区市民館に於いて、鷹丘文化協会設立総会が開かれた。来賓として、市教育委員長、地元市議員、小学校長、豊橋文化協会会長、牛川文化協会会長の臨席を賜った。初代役員は、会長：笠尾月彦、副会長：西尾稔、松岡絹代、会計：鈴木武和、監査：今泉潔、牧野葎子の布陣で、文芸部11部、芸能部7部で発足した。

昭和57年(1982)4月25日実質初年度の総会が行われた。会員数190名、年会費300円、校区補助金30,000円で運営を開始した。

昭和57年(1982)は校区創立5周年にあたり、校区文化祭を記念大会として、当時の市長青木氏を迎えて盛大に開催された。この大会が現在の文化祭に継承され、運営の基本形態が確立した。

文化祭の開催、春期芸能発表会開催、機関誌発行、研修旅行の実施、盆おどりに協賛、豊橋まつりの総おどりに参加、地区文協連絡協議会に加入、地区市民総合展・総合祭に参加など活動の場を広げている。

創立10周年記念文化祭は、平成3年(1991)7月6、7日に豊橋市民文化会館で開催し、10周年記念誌を発行した。

平成4年(1992)11月3日豊橋市教育委員会より地域文化活動の推進を評価され、団体部門で「文化振興賞」の表彰を受けた。

平成6年(1994)7月10日ライブポート豊

橋の開館を祝い、鷹丘文化協会芸能祭を開催した。



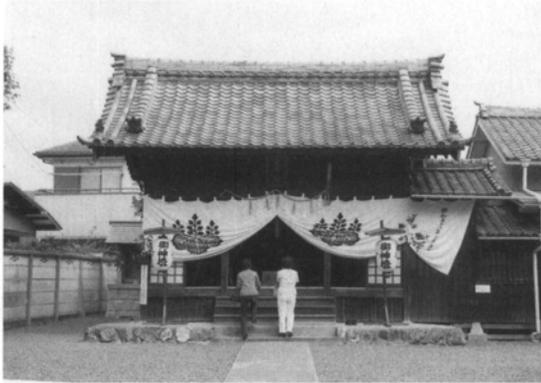
平成13年(2001)11月3日には、創立20周年記念文化祭を開催した。記念文化祭は校区市民館で早川勝市長、文化振興財団、近隣文協役員の参加を得て盛大に開催された。記念誌『20年の歩み』を発行するなど活動を継続し、現在に至っている。



創立10周年記念講演会
「豊橋に移り住んで40年」
豊橋市民病院 名誉院長 森 泰樹氏

3 史跡・文化財

(1) 小鷹野神明社



- ・鎮座地 豊橋市東小鷹野1-2-6
- ・御祭神 天照大御神
- ・創立由緒 元禄3年(1690)小鷹野新田開発に際して、奉祀された。小鷹野は大和時代から開発されたところで、牛川地方の遺物、遺跡をみると、当社付近一帯は古代集落の跡であったことがわかる。

鎌倉、室町時代の動乱期に住民が四散したため定かではないが、当社周辺の古寺、古城、遺跡等をみると要衝の地として重要視されていたことが推測される。

徳川期に入って再び開発が行われ、元禄初年(1688)、忠興と共に新切(新しく開墾した土地)がなされた。当社はこの新切の鎮護として奉斎されたものである。

奉斎鎮神明御璽

三河国八名郡小鷹野

元禄3年(1690)庚午9月16日

斎主当国渥美郡吉田方熊野権現

神主 鈴木伊賀守

禰宜 平尾清太夫源信親

小鷹野新田氏子 仁木兵治良

これがそのときの記録であるが、この開発には仁木家が関係深かったとみえ、爾来幕末までこの家が氏子の代表として棟札に記載されている。

以下、棟札に神明社の記録が残っている。

・文久2年(1862)壬戌^{みづのえいぬ}2月25日

奉再興神明社頭壹宇

遷宮神主司肥後守 藤原守富

小鷹野氏子 仁木兵治郎

・明治6年(1873)癸酉^{みづのととり}2月22日

奉新造神明社一字

当村願主 仁木兵次郎

仁木大兵衛

・明治40年(1907)2月13日

奉納神領 442坪

奉納者 平尾家一郎

・明治44年(1911)1月

奉新築神門一字

願主 平尾家一郎

社掌 尾崎古雄

氏子総代 平尾家一郎

山内悦治郎

大木清蔵

昭和30年(1955)小鷹野神明社改築の決議を為した。それ以来3ヵ年間寄付金積み立てと、委員並びに小鷹野全住民の献身的努力によって、昭和33年(1958)7月に本殿、幣殿、拝殿が竣工した。なお現在の社務所(小鷹野公民館)は昭和43年(1968)の建築である。

年間行事は「小鷹野まつり」の秋季例祭の他に秋葉神社祭、歳旦祭、節分祭、春季例祭等である。また鏡割り等で氏子との交流を計っている。

平成6年(1994)西小鷹野、東小鷹野1・2丁目、東小鷹野3・4丁目の3町の住民の意向と芳志^{ほうし}によって、神明社境内に秋葉社が建立された。

*棟札=棟木に建築の記録を書いて残す

*宇=建物を数える語(例 一字の堂)

(2) 小鷹野まつりと手筒花火

小鷹野神明社秋季祭礼に初めて手筒花火が上がったのは昭和63年（1988）である。小鷹野地区は区画整理が終わり新住民が急激に増加していた。

この手筒花火を導入するに当たり、熱き想いの二人がいた。当時の西小鷹野町総代 堀本義一と、行動派の富田武である。堀本氏は「新校区に新住民、隣は何をする人ぞ、では困る。町民が結束して活力ある祭りとお盆おどりを作って欲しい」という思いをもっていた。富田氏は「ここで生まれた子どもたちに素晴らしい故郷を創ってあげたい」と思い行動した。

祭り等を勉強するために浜松、田原、安城

等の県内外の祭りを見て回った。同志の呼びかけに対し町内の手筒花火打ち上げ経験者が集い「市内の祭りの人出で3本の指に入る祭りを創りだそう！」という合言葉で努力した。平成6年（1994）には三河伝統手筒花火連合会に加入し「豊橋まつり・手筒花火」に参加、また翌年の第1回「炎の祭典」から第11回を数えるすべての会に参加するまでに成長した。



平成8年（1996）6月21日には、ハワイで開催されたパン・パシフィック・フェスティバルに参加して多くの観衆を魅了した。

一方、小鷹野まつりが今日のように隆盛を迎えたのは、自治会役員、氏子総代、小鷹野まつり振興会（東小鷹野1・2丁目、東小鷹野3・4丁目＝成年会、西小鷹野＝西友会）の長年の協力、努力の積み重ねがあった。

現在は毎年10月の第2土曜日と日曜日に例祭が行われている。土曜日の昼間に車屋台、鷹丘小児童によるロックソーラン踊りや、御神輿（男女）パレードが3町合同で行われ、夜は小鷹野公園で小鷹野まつり振興会による手筒花火が盛大に行われる。各町毎の区切りには乱玉花火もあげられ、桜丘高等学校の桜花太鼓の競演もある。また、氏子には神明社の抽選券が配布され、日曜には境内でのもち投げもあり、子どもや母親の楽しみになっている。

当初は3町の氏子総代と自治会役員が中心となって境内に舞台を作り、踊りや、カラオ



1996. 6.21日 鷹丘手筒花火同好会の皆さんがハワイで開催されたパンパシフィックフェスティバルに参加した

Sparks brighten the night at Magic Island in a display of a 400-year tradition by the Mikawa Traditional Tezutsu Fireworks Association of Toyohashi, Japan, yesterday.

Association members launched the fireworks from large hand-held bamboo tubes.

The display was part of the Pan-Pacific Festival-Matsuri in Hawaii, as was a bon dance, right, led by Mildred Masuda of the Miyazono Minyo Dance Club.

The festival continues through the weekend with a number of events, including a parade at 9 a.m. today from Ala Moana Park to Kapiolani Park.

ケ大会を行って「村の鎮守の祭り」を演出してきた。昭和60年代になって自治会役員の幹旋により各町成年会が結成され、古きよき伝統の継承と「ふれあい」「ふるさと創り」を推進し、お祭り、盆おどり、炎の祭典、新春獅子舞、節分のそれぞれに活動している。

(3) 忠興八幡神社



・一四級社 旧村社

・鎮座地 豊橋市牛川町乗小路30番地

・祭神 菅田^{ほんだ}天皇、天照大御神（武将に信仰された武神でもあるが、一般には農耕神と受け取られていた。）

・創立由緒 本社創立の年代は不詳であるが、忠興村新切検地帳に貞享3年（1686）丙寅^{ひのえとら}10月と日付があることから、この時代の創建と思われる。当時の領主小笠原壱岐守長祐に請うて本村の開発に着手し、貞享3年（1686）に功成り、初めて検地を受けた時の記録には、その石高83石5斗4升2合とある。但し棟札は元禄7年（1694）9月15日より古いものはない。この検地を受けた頃から村は鎮守として本社を創立して、その加護を祈ってきたと思われる。

昭和57年（1982）八幡社造営について検討が開始され、総工費1億3,000万円をかけて平成2年（1990）9月23日に現在の新社殿が完成した。

・社殿 本殿、幣殿、拝殿、社務所等

・特殊神事 的の神事、氏子百度参り

・宮司 佐藤浩士

・祭神要約 八幡社奥の院、神明社、伊雑宮、秋葉社、稲荷社、乗小路山山の神、庚申塚、地藏尊、一宝観音が祀られている。

*平成12年（2000）新社殿の完成を機に従来の八幡社の呼称を八幡神社に改めた。

野川神明社（忠興一丁目）は元禄時代（1690年代）の野川新田の開発がなされた頃に創建されたものと考えられている。その後、この地が荒廃し氏子が少なかったため、昭和32年（1957）4月1日に八幡社に合祀された。祭神は天照皇大神である。

(4) 八幡社参集殿の建築

物資が乏しく、生活基盤も整っていない太平洋戦争後の混乱期に、忠興住民19戸の人々が集まり公民館を造る話がまとまった。

八幡社の社有地を住民総出でツルハシやスコップ、大八車等で整地し、木材は八幡社と神明社から切り出して28.6坪の木造平屋建ての参集殿が昭和24年（1949）10月に完成した。忠興の公民館として自治会活動や、秋の祭礼の催しものに大きく貢献した。

昭和56年（1981）区画整理完成後、めざましく発展する町内事情に対応するため、「新参集殿忠興八幡会館」の建設が総予算1,700万円余りで施工され、総建坪53坪の平屋建八幡会館が昭和56年（1981）6月26日に竣工した。

(5) 氏子青年会の発足と山車の建造

忠興町が新興住宅地として八幡社を取り囲むかたちで発展を始めた。住民の多数は三河近辺から忠興に移住し、生涯の安住の地として求めてきた人たちである。

居を構え古里を思い出すと、幼い頃遊んだ神社の境内、祭礼の笛、太鼓の音などが思い

出される。こんな想いを子どもたちに残したいということで昭和56年（1981）8月に氏子青年会が発足した。昭和57年（1982）5月氏子青年会は八幡社祭礼のシンボルとなる山車を建造することになった。建造リーダーは青年会の熊谷三吉、小塩君樹が担当し、青年会の献身的な奉仕活動により、山車の製作、彫刻、磨き等が連日夕方から夜半にかけて行われた。

総工費900万円で昭和57年（1982）10月3日に完成した。現在は子ども連の祭囃子にのって、老いも若きも一緒になって町内を巡行している。

(6) 鎌倉街道



校区のみなさんへ

僕たちは、全校総合学習で「鎌倉街道」のことを調べました。その中で、たくさんの方にお世話になりました。そして、いろいろなことがわかり、とても勉強になりました。しかし、僕たちにとってたくさんの知識を得た以上にうれしかったのは、出会いと校区に対する誇りでした。僕たちは、「鎌倉街道」のことを知ったことで、校区のことを見直しました。単純かもしれませんが、誇りにも思いました。そして、できればこの気持ちを校区のみなさんに伝えたいし、同じ気持ちを味わってほしいと思いました。

このパンフレットを通して、少しでもこの気持ちが伝わったらうれしいです。

平成14年度 全校総合学習発表会

東陵中	3年	木俣 宏陽	松浦 功弥
		山口 大暁	渡 貴博

僕たちが、「鎌倉街道」について調べようと思った理由は、東陵中学校の校区に関係しているらしいということは小学校の時に聞いて知っていましたが、実際に「鎌倉街道」とは、どういう道なのか。また、どこを歩いていたのか、よくわからなかったからです。

鎌倉街道とは？

資料で調べた結果、「鎌倉街道」は、鎌倉時代にできた道で、源頼朝が京都に上洛した時に使った道を基本にして、当時の人たちの行き来や軍事・その他の物資の輸送に使われた道の総称でした。そのため、鎌倉から全国各地にのびており、全国各地に存在しましたが、鎌倉と京都を結ぶ道が主なものでした。また、それは、だいたい「上道」「中道」「下道」の3つに分類されます。その中で、このあたりは、後に東海道と言われるようになった「上道」が歩いていたということがわかりました。

鎌倉街道はどこを歩いているか？

白須賀（静岡県）→（豊橋）中原
 → 雲谷の普門寺 → 船形山
 → 岩崎の鞍掛神社 → 朝倉川
 → 赤岩寺 → 乗小路峠
 → 忠興 → 石巻 → 豊川

実際にこのあたりでは、具体的にどこを歩いていたか紹介します。資料によると、時代とともに多少変更があったようですが、一般的に静岡県の白須賀から中原に出て、そこから北に向かって雲谷の普門寺に出て、舟形山を越えて、岩崎の鞍掛神社、朝倉川を渡って赤岩寺の門前を過ぎ、乗小路峠を越え、牛川の忠興に出て、石巻の和田を歩いて、豊川に出たと言われています。

鎌倉街道 ゆかりの旧跡（多米地区）

鞍掛神社は、元は米山大明神（鞍馬大明神）と呼ばれていましたが、源頼朝が鞍を奉納して武運長久を祈願したことにちなんで鞍掛神社と名を改めたと伝えられています。

*武運長久＝戦いの勝敗の運が長く続くこと

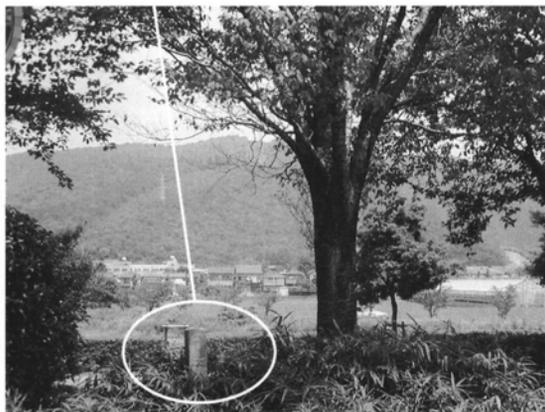


鞍掛神社（岩崎町）

駒止めの桜は、その名のとおり源頼朝が京



都に上洛するときに乗っていた馬を止めた桜の木です。鎌倉時代当時の木は枯れたため、今の木は植え替えられたものです。



現在の駒止めの桜

葦毛湿原は、愛知県指定天然記念物にも指定されています。地名は、源頼朝の葦毛の愛

馬が急な山越えによって息絶え葬ったことからついたそうです。

これまで僕たちが調べた範囲で、東陵校区の中で昔「鎌倉街道」が通っていたと考えられるところを紹介します。まず、多米の蒲郡信用金庫のあたりから山の中に入っていきます。写真Aのように山の中に入るところは、見逃しそうなところでした。中に入ると切り通しの道がずっと続きます。それを進んでいくと、牛川町乗小路のすみっこに出ます。その後、東陵中の正門横に出て、学校沿いに牛川東保育園のあたりに出て、忠興から石巻のほうへ抜けていったと考えています。



A 乗小路峠の切通道

実際に歩いてみても、僕たちには、まだまだ本当の「鎌倉街道」の道筋についての結論を出すことはできませんでした。

今後やりたいことは、やはり「鎌倉街道」道筋をもっと調べて、道筋の確定とその証拠を見つけることです。そして、東陵中学校の生徒だけでなく、校区のみなさんに「鎌倉街道」について知ってもらうことです。僕たちは約半年にわたって「鎌倉街道」について調べてみて、改めて東陵中学校の校区のことを見直しました。「鎌倉街道」が通っていたことを知ったことで、単純かもしれませんが、僕たちは誇らしい気持ちになりました。そんな気持ちを校区のみなさんももってくれたら、校区が今よりもっとよくなると思います。で

すから、みなさんに「鎌倉街道」のことを知らせていきたいし、道筋がはっきりしたら、将来「鎌倉街道」の紹介看板も立てたいと思っています。

4 人物・昔話

(1) 儒医 いまいずみ りつげん 今泉 立言

儒医として知られている今泉立言は、忠興村の人で、父は今泉清七郎である。

立言は、儒医伊藤道迪じゅいに学び、吉田曲尺手で町医を開業していた。門人も多数有り吉田藩の御殿にも勤めたと伝えられている。また、京都正親町三条御殿、仙道御所、小森御殿内にも勤め、書簡等も送っていた。

天保8年(1837)10月17日没し、牛川町西側桃林寺に位牌がある。門人たちによって立てられた碑も同寺内にある。

* 立言の師伊藤道迪の墓碑は、吉田町龍拈寺にある。太田蜀山人の撰文の墓誌銘があり、その台石には、門人9人の名が刻まれている。そこには今泉立言の名も見える。(豊橋医家列伝那賀山乙巳文述)

(2) 狂歌 泉 公平 (今泉 公平)

忠興は鎌倉時代に、乗小路を越えて雲谷に通じた道筋があったためか、早くから文化の芽生えがあったようである。

今泉家一統には、医者而今泉立言、狂歌師而今泉公平等が後世に名を残している。

今泉公平は、別号草河を用いていたが、本名は周作である。文化年間に生きた人である。狂歌に長じ天文地理の学を究め、書をよくした。

公平は書が巧みで、米粒にいろは47文字を書いたという。それにまつわる伝説があるので紹介したい。嵩山の正宗寺に丸山応挙が遊歴の旅の途中に立ち寄った。ある日、今泉公

平が米粒にいろはを書くと聞いて、応挙も米粒にいろはを書いてみた。そして二人が書いたものを比べたところ、公平の書いたものに点が一つ落ちていたので、応挙にはかなわなかったという話である。

今残っている文献としては、太田南畝(蜀山人)の著書『一話一言』小春紀行(文化2年、1805)の中に公平と出会いの一節がある。

住家は字郷裏(今の三菱レイヨン東門の付近)に、およそ二千坪くらいの宅地があり、廻りにしし除けの土手があった。屋敷は荒れ果てて、家の中で星が見えるほどであったという。よほど変わった人で、書き物も復古を裏返して使用していたという。

(3) 茶華道の師匠 なかがむら えつじろう 中村 悦次郎

茶道華道の師匠として、数多くの門人を指導育成した中村悦次郎は、明治16年(1883)7月14日、上伝馬で生まれた。26歳のとき、牛川字野川に新居を構えた。

当時周辺には一戸もなく、石取山の槌音、発破音が聞こえるだけで、人通りも少ない、淋しいところであった。

当時小鷹野には、華道の家元池坊、茶道宗偏流の奥儀を究めた宗匠、梶章(元岡崎藩の家老職)が住んでいた。(現鷹丘小学校の北)

悦次郎はこの宗匠の門人となった。同輩として学んだ黒田新吉、尾川栄作は家事の都合で中退したが、悦次郎はこの道一筋に精進して、華道は、準華督すんわとく 中村秋月。茶道は、正教授せいけつ 錦楓庵秋月として一家を成した。

※注) 華道、茶道の資格・段位

その門人としては、忠興而今泉七郎、暮川には鈴木善次、加藤敬司などがあり、ほかに東田・岩田方面に多数の門人がいた。

秋月師匠は、性きわめて謹直、平素礼儀正しく、門人には温情懇切、常に羽織袴と白足袋で、ゆたかな宗匠風格の持ち主であった。

小池の私立豊橋市愛知和洋高等女学校校長であった高倉半次郎の招きにより、茶華道教師となった。ここでは、長く女子の情操教育に尽くされ、生徒、父兄から、深く敬愛されていた。しかし、昭和27年（1952）10月27日、70歳で逝去された。現在、後継者として茶華道で活躍されている中村もと（宗元）は、先代秋月の次女（大正元年（1912）生まれ）である。

(4) 詩人 まるやま かおる 丸山薫

丸山薫は、明治32年（1899）6月8日丸山重俊・武子の二男に生まれ、異母兄二人がいたため戸籍上は四男であった。

明治44年（1911）5月に父が没したため、9月には市内瓦町に住んでいた伯父、市川信順の屋敷内に家を建て、移り住んだ。そして、二学期から八町小学校へ転入学した。薫は、父が官吏であったため、その転地に伴って学校を転々とした。八町小学校は5番目の学校であった。薫はこのことについて『伊良湖岬』に『あまりにも諸方を移り歩かされた私の心の中には…エトランゼの思いがはぐくまれていた』と記している。

明治45年（1912）、愛知県立第四中学校（現時習館高校）に入学した。このころから『南極探検記』『海のロマンス』等の本を愛読し、海への憧れを持つようになった。薫にとって“海”は一つの詩的源泉として残った。

大正6年（1917）母や親戚の反対を押し切って東京商船学校（現東京商船大学）を受験したが失敗し、東京の予備校に通いたいという薫の希望に沿って一家は東京四谷内藤町に移った。翌年、商船学校に入学できたものの、まもなく脚気のため退学した。

大正10年（1921）には第三高等学校（現京都大学）文科丙類に入学し、生涯の友となる桑原武夫・三好達治・梶井基次郎らと知合い、

やがて散文詩を書き始めた。このとき、三好達治は薫のことを『丸山君には欣賞すべき早熟の才がある』と評した。続いて、大正14年（1925）には東京帝国大学文科に入学した。このころ、豊橋で後に妻となる高井三四子と出会う。

昭和7年（1932）、処女詩集『帆・ランプ・鷗』を刊行した。ユニークな抒情精神とスタイルを持って詩壇に清新な息吹をもたらした。

昭和9年（1934）には掘辰雄・三好達治と三人で同人誌『四季』を創刊、次々と詩を発表した。このころ萩原朔太郎・中原中也とも交流があり、大きな影響を受けた。



蟬川の自宅にて

昭和23年（1948）には再び市内東田町前山に移り、大戦後の豊橋の感想を『帰郷の感』で次のように記している。

『30年ぶり豊橋に帰って住むと、茜の色が瞳に染みて鮮やかだ。秋末から冬にかけてのさむざむとした晴天の夕空を染めるあの柿色の余炎を眺めると、街は焼けてしまっても索漠としたバラックの屋根の上に、そぞろに懐かしい少年の日が浮かび上がる。…音便が多くて、少々田舎くさくても、やはり三河の方言は私の耳には安心して聴ける。』

昭和31年（1956）9月に多米町蟬川33（現東小鷹野三丁目18）に移る。その後、愛知大学文学部教授となり、詩を書き続けたが、昭和49年（1974）10月21日、自宅で永眠した。現在は夫人も転居し、一般住宅となっている。

(5) 牛川鋳山 後藤 庄五郎

後藤庄五郎と牛川鋳山は鷹丘の歴史を見た場合避けられない人物である。

同氏は嘉永4年(1851)10月15日に八名郡牛川村の石灰製造を営む旧家に生まれた。

この地方の石灰製造業は、石巻山を中心として八名郡嵩山村と牛川村で江戸時代から行われていた。石灰は、石垣用材・石灰・セメント・カーバイト・肥料等の用途があった。そして、次第に近代化が進むにつれて、セメント原料としての利用価値が高くなっていった。

嵩山村での石灰製造の歴史は古く、元禄以前から製造されていた記録がある。牛川村では、文政4年(1821)に吉田藩主松平信順が乗小路で鷹狩りをしていたとき、先々代の庄五郎に命じて牛川村に石灰役所を設け、石灰を製造したのが始まりである。庄五郎は、吉田藩の御用、石灰焼方支配となって窯場を築き、工夫を雇って乗小路の石を採掘して石灰を焼製した。

しかし、維新後、豊橋藩は明治3年(1870)にこの石灰役所を廃止し、その後は存続会社において石灰を焼製していた。廃藩の時は、藩士石井清水が石灰がまなどの諸道具を管理していたが、明治5年(1872)2月牛川村後藤庄五郎と平尾勘右衛門の二人が譲り受けることになった。

そして、明治13年(1880)乗小路の官有地2町歩(約6,000坪)を開抗し、1カ年の石灰切り出し高3,600石を見積もっていた。八名郡一帯で産出された石灰は、第二回勸業博覧会などに出品されて石灰産地としての実績を得た。更に、明治17年(1884)から明治20年(1887)にかけて行われた歩兵第18連隊の分営建設や、明治21年(1888)から22年(1889)にわたって行われた東海道線の鉄道工事によって需要が増加し、益々生産高が増えた。一

方、嵩山・牛川両村の石灰業者は明治18年(1885)に八名郡石灰営業組合を組織し、庄五郎は副頭取となった。

石灰製造のほかには庄五郎は村会・郡会・県会議員として活躍した。まず、明治23年(1890)には牛川村長に推された。次いで明治24年(1891)には八名郡会議員に当選し明治36年(1903)に議長となった。更に、明治40年(1907)には愛知県会議員に当選し、同時に参事会員も兼ねた。特に、県会議員時代に西遠州と東三河の連絡道路の開通、すなわち本坂峠開削の企画などをはじめとして村政・郡政・県政における公共事業に貢献し、地域産業開発に尽力した。数々の業績を残し、昭和3年(1928)10月18日に77歳で没した。

(6) 半の木地藏

三菱レイヨン東門付近の畑の片隅に石の地藏が建てられていた。土地の持ち主は神ヶ谷の篠田進で、野ざらしでは不憫だと、昭和30年(1955)3月、自宅の門先に祠を建て供養していた。この地藏は高さ一尺二寸ほどで、元禄9丙子年(1696)6月26日と刻まれているが、詳細は明らかでない。290年も風雨にさらされ、篠田氏により神ヶ谷興福寺に移され供養が行われている。この地藏があった場



所は、牛川の桃林寺から猫淵(今の目鏡池)のほとりを通り、昔の龍雲寺や観音堂跡に出る畑道に沿っているとところにあった。この畑道は森岡から忠興に通じた、昔のお伝馬道に連

なり、古くから重要な交通路で、鎌倉街道とも言われていた。

(7) 半の木の芝居

明治の初めころは御維新騒ぎで世の中は落ちつかず、庶民の憩いの場が無かった。若者たちは万人講を目論み、村芝居などを行った。半の木でも万人講の村芝居が行われた。

舞台小屋は、成る(棒丸太)を組み、周りに葎むしろを吊るした掛け小屋だった。

この芝居に出店をした餅屋が、路地に並べる間もなく、若者たちが寄ってたかって頬ばり、誰がどれほど食べたかわからず、置いていった銭は勘定足らずで、大損をしたという話がある。これは当時若者であった、古老の笑い話であるが、この芝居を風刺した次のような狂歌が伝えられている。

十月の中の十日に芝居して

幕は四幕で 麦はいつ蒔く

- ・付記 昭和に入って若衆がお祭りなどで旧参集殿(忠興八幡社)を利用して手づくり芝居、芸題、明治一代女などを競って演じたという。

(8) 抜け井戸

牛川東保育園の東、乗小路峠への道を200m行くと、道端の山中に、径6m、深さ4mほどの大穴がある。不思議な事には、どんな大雨が降っても水が溜まらないという。

地元の伝説では、『大昔、大きなタニシがこの穴から出て唸うなった』という。消滅寸前の伝説の断片で、意味も不明であるが、タニシは元俗信として「田の神の使い」(タニシ=田主)水神とも考えられていた。水の溜まらぬ田をかご田、抜け田とも言われている。そこでタニシの唸りは、水神の叱声呪しっせいじゅそとも思われる。

井戸は井処。井、堰せき、泉、池(井筒)、川ともに水神のうしはくところである。

現在、この抜け井戸の場所は見定め難い状況であるが、東陵中学校東の道路沿いと推定

される。古老の話によると山仕事より帰り道休憩場になっていたと言われる。

- *うしはく=うし(大人)として領有するの意。統治する。支配する。

(9) 廃寺 晴雲寺

小鷹野屏風岩は光生会赤岩病院のビル棟(多米町蟬川)でその全容は見えなくなったが、その裏にある弓張山系の先端にある。古生層の角岩硅岩などからなる巨岩群の自然露頭である。尖頭、屹立する巨石群は屏風状である。

この一帯には宝永年間(1704)に浄土宗の屏風山晴雲寺という寺があった。

開基は吉田城主牧野大学であるが、当時吉田藩には、諸種の災厄が相次いで起こり、巨額の出費に苦しんだうえ、4年後正徳2年(1712)に、日向に転封となり、ついに堂宇の完成に至らなかったという。

境内は屏風岩を中にして、東西198間、南北182間もあったといわれている。その中に一字の観音堂のみ、永く伝えられ、後世頽廃して本尊だけが、付近の家に祀られていたということである。

昭和45年(1970)頃、ここにアスレチックが開設されたが、3年ほどで閉鎖された。また平成12年(2000)光生会赤岩病院(多米町蟬川33)が建設され、現在その病棟の影に屏風岩を垣間見ることができる。

- *牧野大学は、牛久保の豪族、牧野新次郎成定の子孫で、父は成春、宝永2年(1705)吉田城主となり、知行8万石を領していた。

(10) 龍雲寺

忠興山龍雲寺は寛永時代(1624年代)に霊峰石巻山麓にある古寺の開基、龍雲首座禅師が一宝観音を守護仏に忠興(現忠興2丁目)

に創建した。

承応元年（1652）、忠興山が中心となって、当郷の開発に当たった。その因によって当山の山号がそのまま村名となり、忠興村となった。

厄除一宝観音菩薩は文明年間（1470年代）三河の守護であった細川氏（成之）の同族細川幽斎が自刻して嫡子の忠興に与えた念持仏である。

明和元年（1764）、一時この守護仏を他寺に移したところ、その村中に厄病が蔓延して、一村が衰亡の危機に瀕した。それによって再び当山に還されて、安置されることになった。

龍雲寺は星霜300年の歴史を持つ古寺であったが昭和33年（1958）住職がいなくなると共に荒廃し、昭和55年（1980）3月16日に一宝観音堂だけが現在の八幡神社北参道沿いに移された。平成10年（1998）4月9日不審火により焼失したが、平成16年（2004）4月11日に多くの崇敬者の協力を得て再建された。

(11) 忠興の庚申日待

忠興新田庚申会つちのえとらの灯明銭帳によると、文政元年戊寅（1818）秋9月25日の記録である。

庚申会は輪番制で、偶数月の申さるの日に、当番が施主となって行われる。祭具一式を収めた箱から、庚申画像、庚申木像や机などを出し、所定の祭壇に祀り、お供え物にお神酒、塩、塩餡の牡丹餅、菓子等をお供えして準備を整える。

庚申仲間の16人は、夕方に参集して心経をあげ、念仏をとこなえて供養する。お斎につき、世間話に夜を更かし、お供物をいただいて散会する。

この風習は戦前まで続いたが、太平洋戦争が激しくなってから、年1回12月申の日に龍雲寺で行っていたが、寺の住職が安住しないので、元のように仲間の輪番制によって、年

1回当番の家で行われている。現在9人で続けられている。

*待（マチ）はマツリ（祭り）の意味で、日マチ、月マチなど。またイチ（市）マチ（町）に通じている。

*お斎（オトキ）仏家の食事のこと。食事をする正しい時（生時）。午後の食事は、生時に対し費時（ヒジ＝オヒジ）という。一般に法要などの食事のことを言う。



昔の茅葺の家

(12) 忠興部落の秋葉代参

忠興の八幡神社に境内末社の秋葉社がある。昔から毎年部落を代表して、遠州の秋葉本社に2人の代参者を立てた。これに当たった者は、各戸からの賽銭をまとめ、朝風呂で身を清め、わらじ掛けで出かけた。

本坂、三ヶ日、風越峠を経て、二俣天竜の渡しを渡り、秋葉の山下あたりで一泊し、翌朝50町（約5km）の山道を登って、本社に参拝する。お札を受けて、帰りは雲名から二俣まで、久根銅山の鉾石船に便乗し、夕方になって帰宅しお札を各戸に配る、一泊二日の代参の旅である。

浜松から二俣まで、軽便鉄道が開通し、二俣からバスが通うようになってから、日帰りができるようになった。戦時中は代参が中断し、それ以降は家を新築した人がお参りに行

くようになった。現在は忠興町自治会役員と、八幡神社役員で代参が行われている。

* 1町=109.9m

(13) 諸穴^{いちあな}

昭和32年(1957)の資料には、八幡社参道に諸の保存用穴が300個余掘られていたと記録されている。

穴の形状は大小色々であり、穴の位置も現在では不明である。地元古老の話によると、繁忙期には穴が不足し、自分たちで掘ったようである。掘り方は先ず縦に掘り進み、内部は平で、奥に広い形である。

入り口は身体が入る程度である。深く掘り進めるとバケツ状の物に土を入れ女衆が綱を引いて土を外に運び出した。

穴の位置は、当時の参道に沿って西向き、山側に掘られていた。現観音堂位置から南に登り、八幡会館方面へ西参道の突き当たりまで点在した。その他、市営住宅東側の南北通路脇に多数の穴が作られていた。

諸の保存地として最適との評判も高く、遠くは羽根井^{かみでんま}、上傳馬、地元はもとより多米方面から牛車、荷車により運ばれた。1人で3、4個の穴を使用する者もあった。

諸の収穫期には八幡社参道付近では“いもを洗う”が如き混雑をしたという。

諸穴 使用者表 (昭和22年度記録)
世話人 近藤 八郎、山田 忠男

牛川忠興	12戸	使用穴	27個
南郷	25戸	〃	46個
中郷	12戸	〃	15個
若宮	10戸	〃	13個
北郷	2戸	〃	3個
洗島	1戸	〃	3個
小鷹野	2戸	〃	3個

諸穴の使用料は一穴につき、昭和22年(1947) 5円、28年(1953) 20円、48年(1973) 50円が支払われ、世話人の手を経て神社費と

して数百円から3千円程の収入になり祭礼費などに使用されていた。

昭和49年(1974)より記録は途絶えている。

(14) 銭亀池^{ぜにがめいけ}(別称:殿様池)

鷹丘校区も、多くの先住民が苦しい開拓の歴史を残している。今から300年程前の元禄時代(1700年代)に多くの新田が開拓された。将軍吉宗の活躍した時代である。吉宗は政治を行う中で米の値段が相場に支配されることに悩み、新田の開発に力を注いだ。吉宗が行った享保の改革の中に『儉約令』『新田開発奨励』『年貢の強化』等が記録に残っている。「生かさず、殺さず」と言うような言葉が出たのもこの頃で、江戸時代の農家の人は米の大半を年貢に納め、残りを売って生活費にあてていた。そして自らは麦、粟、ひえ、大豆を食べる貧しい生活を強いられた。

新田の開発はまず、ため池を造り、用水路を掘り、新田を起こす、という方法が採られた。工事はうまくいかず挫折の連続であったようで、多くの人が動員された。石巻平野村の資料によると、一つのため池を造るのに3,000人が動員された。近くの人のもとより、浪の上「牛川」、藤ヶ池「下条」、種の上「三上」、当古村等の広範囲の庄屋が動員されている。現在のため池としては、緑ヶ丘にある銭亀池がこの当時に造られたものと言われている。



現在の銭亀池

鷹丘校区の街路樹

住みやすい町、緑の町として、豊橋市は全国の人口30万以上の都市の中でも上位に認定されている。緑は公園緑地、街路樹、河川敷、山林、宅地の植木や生け垣などがあり、これらが都市景観を形成している。校区の区画整理された道路に植えられている街路樹の存在は大きく、住みやすい町の大きなポイントと

なっている。

全国的に評価の高い豊橋市の中で、この鷹丘校区の緑の環境は屈指であると思われる。そこで、街路樹地図、樹名一覧、樹影、みどころ等を調査した。

将来の街路樹の成長と併せて市民文化の変遷を辿る事が出来れば幸いである。

街路樹名称			みどころ
カロリアポプラ	ヤナギ科	落葉高木	樹影 葉形 若葉 並木の御三家
プラタナス	スズカケノキ科	落葉高木	樹影 葉形 鈴のような丸い実
アメリカフウ	マンサク科	落葉高木	葉形 (モミジ葉) 秋の紅葉
ナンキンハゼ	ドウダイグサ科	落葉高木	(蠟の樹) 葉形 果実 秋の紅葉
ヤマボウシ	ミズキ科	落葉小高木	樹影 開花6月 苞の形状 紅葉
ハナミズキ	ミズキ科	落葉小高木	樹影 開花5月 苞の形状 紅葉
トウカエデ	カエデ科	落葉高木	樹影 淡黄の小花 実に羽根 紅葉
クスノキ	クスノキ科	常緑大高木	(樟脳) 樹影 開花6月 淡黄の小花
ソメイヨシノ	バラ科	落葉高木	花 開花4月 落花時と葉桜の風情
ケヤキ	ニレ科	落葉大高木	樹影 開花6月 淡黄の小花 紅葉
ユリノキ	モクレン科	落葉高木	葉形 開花5月 黄緑の鐘状の花
イチョウ	イチョウ科	落葉高木	葉形 芽吹き新緑 落葉の風情
ヤマモモ	ヤマモモ科	常緑小高木	樹影 果実6月 赤く熟成
ナツミカン	キンカン亜科	常緑小高木	果実は橙黄色で熟期は5～6月
ハクモクレン	モクレン科	落葉高木	葉形 開花4月 白色九弁大輪の花
コブシ	モクレン科	落葉高木	開花4月 白色 蕾は小児コブシ形

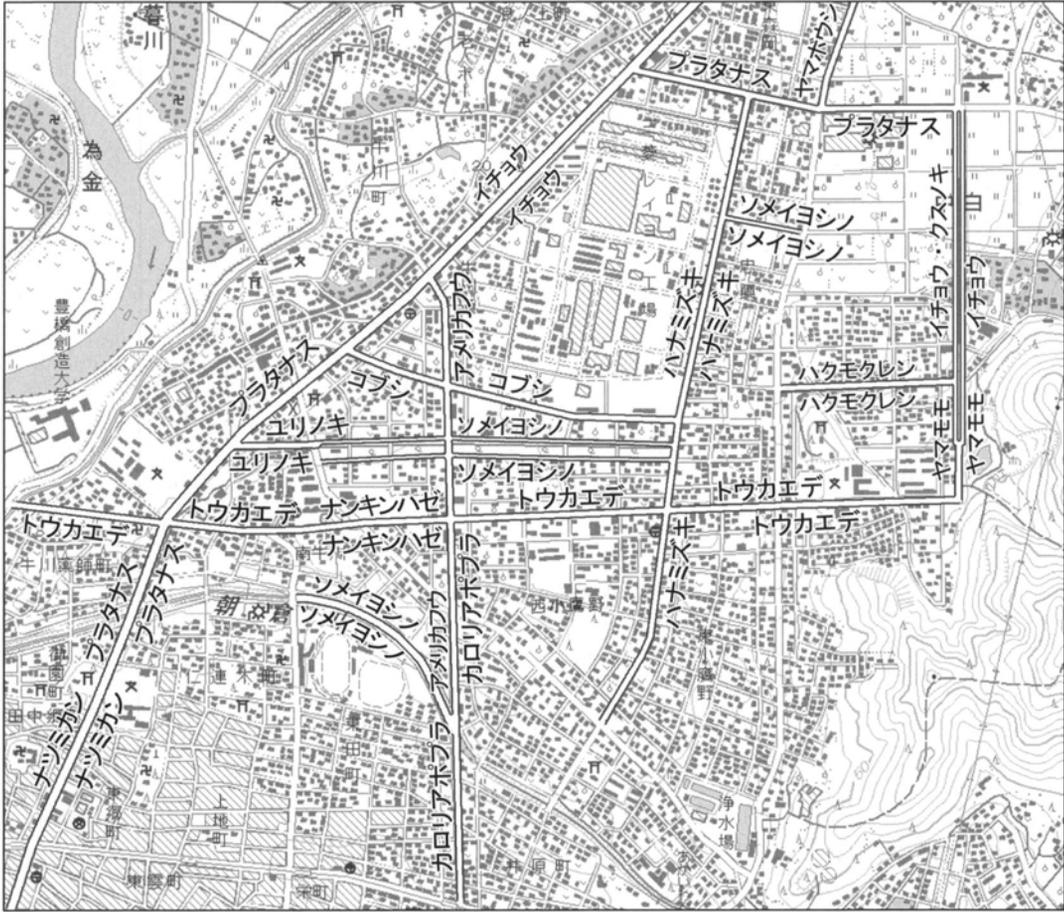
街路樹の中のハナミズキについては、当校区の「花みずきの会」(別項、校区の活動にて紹介)が地域住民として除草等の街路樹管理をサークル活動で行っている。

ハナミズキ通りを代表に、ハクモクレン、コブシ、トウカエデ、ナンキンハゼの個性的で四季折々の開花、樹影の変化に癒されている環境である。

青陵街道、東田坂上から青陵中学校に至る

県道両側にナツミカンの街路樹がある。青陵中学校の通学道路である。これは昭和36年(1961)に38本植えられたもので、当時は飯田市のリンゴ並木に伍して話題となったナツミカン通りである。

昭和42年(1967)11月11日(市民の日)には、夏みかん並木を作り、緑化活動を進めた青陵中学校生徒徒会に豊橋市教育委員会より豊橋文化奨励賞が贈られた。



鷹丘の四季（昭和10年代）

春、浄水場周辺が桜の名所であった。近郊より花見客でにぎわいを見せ、山頂の桜の綺麗さ、展望がまた良い。市街地を遠方に眼下に小鷹野の田園風景が広がり、点在する家並みも美しく、遠く汽車の煙も見える。

夏、蝉の鳴き声で目が覚める。夏休み、子どもの遊び場は蝉川（朝倉川）だ、泳ぎ、魚取りに夢中になっている。川底の魚を手作りの銚子で獲る。何種類かの魚が居ることか。

夜が特別きれいだ、ホタルが乱舞し、光が川面を照らす。東田方面から見物に来た人もあった。

秋、乗小路周辺の山で松茸狩り、山の随所で松茸が顔を出す。山道を歩くとウサギ・タヌキ・時には鹿も目にした。野生の栗やアケビが取れ、小鳥のさえずりも心地よい。

冬、家の垣根がほとんど山茶花だ。初冬に花が咲くと学童たちは通学道の花をつみながら登校する。夜は満天の星空、流星がひときわ美しい。家庭の灯りはランプが主で、電気のある家庭は少なく、夜の外出が大変だ。提灯では無灯道に迷いそう。

知らない土地ではよくキツネにだまされた。という話もあった。昭和初期の鷹丘を思い出す。



鷹丘校区の変遷（町別自治会総代氏名・加入世帯数）

総代 年度	鷹丘校区	忠 興	東小鷹野	東小鷹野 一・二丁目	東小鷹野 三・四丁目	西小鷹野	緑ヶ丘	備 考
昭53年	仁枝 清 (1930戸)	近藤幸夫 (460戸)	仁枝 清 (623戸)			加藤光雄 (450戸)	白井一正 (370戸)	牛川より鷹丘校区分離・発足
昭54年	星野 広 (2029戸)	笠尾月彦 (500戸)	星野 広 (670戸)			↓ (450戸)	松富三千 (360戸)	昭和52年以前の変遷
昭55年	↓ (2184戸)	小久保二郎 (596戸)	↓ (683戸)			石川正章 (510戸)	小久保辰巳 (395戸)	
昭56年	↓ (2264戸)	北澤国富 (650戸)	↓ (710戸)			↓ (545戸)	県 伸吾 (359戸)	緑ヶ丘 昭和52年 県営牛川団地から 緑ヶ丘に 町内会名変更
昭57年	↓ (2350戸)	彦坂浅男 (692戸)	↓ (725戸)			↓ (548戸)	↓ (385戸)	小鷹野 昭和52年 小鷹野を西小鷹野と 東小鷹野に分離
昭58年	石川正章 (2383戸)	山田豊平 (715戸)	西尾 稔 (726戸)			↓ (552戸)	七原良一 (390戸)	
昭59年	小林昭七 (2440戸)	小林昭七 (735戸)		西尾 稔 (351戸)	星野 広 (390戸)	↓ (569戸)	鈴木弘志 (395戸)	東小鷹野町を一・二丁目と 三・四丁目に町を分離
昭60年	↓ (2493戸)	↓ (750戸)		↓ (351戸)	牧野福一 (395戸)	↓ (611戸)	半羽かよ (386戸)	
昭61年	西尾 稔 (2588戸)	↓ (800戸)		↓ (352戸)	↓ (420戸)	↓ (621戸)	山本慶司 (395戸)	町内会に含まれる地籍
昭62年	牧野福一 (2666戸)	松岡 勤 (860戸)		富田正徳 (335戸)	↓ (440戸)	↓ (636戸)	鈴木宜夫 (395戸)	
昭63年	↓ (2703戸)	↓ (890戸)		↓ (360戸)	↓ (440戸)	堀本義一 (655戸)	↓ (358戸)	東小鷹野1・2丁目 東小鷹野1丁目・ 2丁目 多米町蟬川の一部を 含む
平1年	↓ (2754戸)	加藤幸一 (895戸)		↓ (372戸)	↓ (442戸)	↓ (684戸)	↓ (361戸)	東小鷹野3・4丁目 東小鷹野3丁目・ 4丁目 多米町蟬川の一部を 含む
平2年	↓ (2852戸)	↓ (920戸)		野口 惇 (380戸)	↓ (462戸)	↓ (730戸)	大木正彦 (360戸)	多米町蟬川の一部を 含む
平3年	堀本義一 (2896戸)	↓ (939戸)		↓ (373戸)	松浦五郎 (476戸)	↓ (748戸)	西 利公 (360戸)	牛川町乗小路の一部 を含む
平4年	↓ (2927戸)	澤田文雄 (940戸)		↓ (392戸)	杉田志郎 (484戸)	↓ (791戸)	河合 明 (320戸)	西小鷹野
平5年	↓ (3057戸)	↓ (990戸)		↓ (429戸)	↓ (500戸)	↓ (808戸)	多田 実 (330戸)	西小鷹野1丁目～ 4丁目 南牛川の一部を含む
平6年	↓ (3223戸)	↓ (1045戸)		鈴木光雄 (440戸)	↓ (516戸)	↓ (844戸)	角崎和幸 (378戸)	忠興
平7年	↓ (3244戸)	安平頼幸 (1054戸)		↓ (441戸)	↓ (517戸)	↓ (852戸)	湯口富士男 (380戸)	忠興1丁目～3丁目 緑ヶ丘1丁目・2丁目 牛川町乗小路の一部 を含む
平8年	↓ (3325戸)	↓ (1054戸)		↓ (441戸)	鶴澤庄三 (530戸)	↓ (875戸)	下橋芳郎 (380戸)	牛川町 池下 〃 東仲田 〃 寺前 〃 押川
平9年	↓ (3419戸)	↓ (1137戸)		↓ (453戸)	↓ (528戸)	↓ (916戸)	中山哲也 (385戸)	
平10年	↓ (3498戸)	川部保雄 (1158戸)		↓ (460戸)	↓ (537戸)	↓ (953戸)	今泉正和 (390戸)	緑ヶ丘
平11年	↓ (3581戸)	↓ (1192戸)		↓ (456戸)	小野 等 (543戸)	↓ (990戸)	↓ (400戸)	緑ヶ丘2丁目10-1 (県営牛川団地)
平12年	↓ (3616戸)	↓ (1194戸)		木村武四 (461戸)	↓ (550戸)	↓ (1016戸)	↓ (400戸)	
平13年	↓ (3704戸)	↓ (1206戸)		↓ (460戸)	↓ (563戸)	↓ (1075戸)	中山哲也 (400戸)	
平14年	川部保雄 (3693戸)	↓ (1228戸)		↓ (455戸)	↓ (565戸)	西尾又一 (1060戸)	神谷勝政 (385戸)	
平15年	↓ (3691戸)	↓ (1238戸)		↓ (455戸)	↓ (580戸)	↓ (1045戸)	多田 実 (373戸)	
平16年	小野 等 (3747戸)	櫻井一郎 (1241戸)		高橋正彦 (470戸)	↓ (603戸)	↓ (1055戸)	↓ (378戸)	
平17年	↓ (3802戸)	↓ (1255戸)		石橋儀一 (522戸)	↓ (625戸)	↓ (1050戸)	↓ (350戸)	

1. ()内数値は町内会加入数
2. 平成18年鷹丘校区総代会発行資料「郷土の変遷」より

参 考 文 献

文 献 名	著 者	年 号	発 行 元
郷土のしおりー牛川		昭和54年	牛川文化協会
古希記念ー炉辺閑話	石川一美	昭和51年	石川一美
牛川小学校百年誌		昭和48年	牛川小学校
20周年記念誌		昭和60年	牛川文化協会
忠興のあゆみー八幡神社		平成2年	忠興八幡神社
創立10周年記念誌ー鷹丘文化のあゆみ		平成3年	鷹丘文化協会
郷土豊橋を築いた先覚者たち		昭和61年	豊橋教育委員会
鷹丘文協20年の歩み		平成13年	鷹丘文化協会
写真集ーふるさと牛川		昭和51年	牛川文化協会
豊橋総代会50周年記念誌		平成15年	豊橋総代会
とよはしの歴史		平成8年	豊橋市
三河風土記	朝日新聞	昭和49年	(社)豊橋文化協会
豊橋の史跡と文化財	小中学校教員16名	昭和56年	豊橋教育委員会
東三河の歴史		昭和58年	東三高校日本史研究会
愛知県の歴史ー歴史と人物でつづる		昭和55年	愛知県郷土史研究会
ふるさと豊橋		昭和54年	豊橋市社会教育連絡協議会
続 ふるさと豊橋		昭和55年	豊橋市社会教育連絡協議会
幾山河 (梅村開市の生涯)		昭和46年	梅村
ふるさと西郷の歴史		平成6年	阿部義明
八名郡の先史遺跡		昭和50年	木下克巳
揺れる原人 唯一の旧人説に疑問		平成14年	静岡新聞 (4月4日)
八名郡誌		昭和7年	八名郡下川村役場
たかおか		昭和57年	鷹丘小学校
研究報告 (総合学習)		平成14年	東陵中学校
2万5千分の1地形図 (豊橋)		平成14年	国土地理院
2万5千分の1地形図 (豊橋)		昭和46年	国土地理院
2万5千分の1地形図 (豊橋)		昭和2年	大日本帝国陸地測量部
2万5千分の1地形図 (石巻山)		明治23年	大日本帝国陸地測量部

編集後記

▼ 市制施行は明治39年（1906）8月1日、当時の鷹丘は八名郡下川村小鷹野、八名郡下川村忠興など、旧牛川村の一部と八名郡石巻村多米の一部を含む地名で呼ばれ、住居17戸・100名程の居住者であった。昭和7年（1932）7月1日の町村合併により豊橋市に編入された。当時の住居は50戸・250名程の居住者であった。しかし新田開発の最盛期や石取山の繁忙期には大幅な居住者の増加があったと推定される。

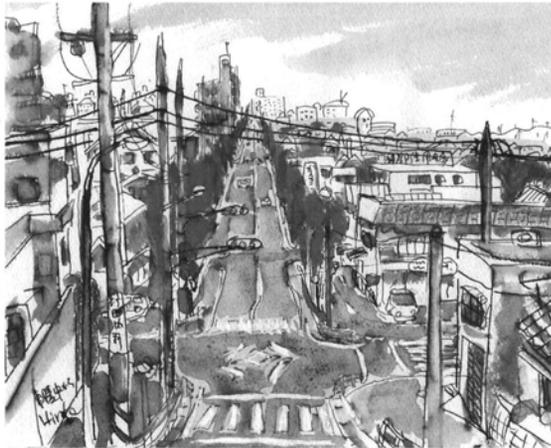
現在の14,100人の住民に至る歴史を見ると、開拓者入植、区画整理事業から現在進行中の都市化や幹線道路網への連結整備、高齢化の問題、安全安心の問題など、今後を想定するのに貴重な資料を提供している。

▼ 鷹丘の歴史資料を紐解くことにより、改めて鷹丘の特徴である牛川原人や石取山（牛川鉦山）、鎌倉街道（伝馬道）、その他多くの古墳、遺跡など歴史の変遷についての理解も深まり、ふるさとの自然と環境の重要性、鷹丘らしさを再認識できるなど、貴重な校区史編纂作業となった。

▼ 校区史刊行にあたり、平成16年9月の編集委員選任から始まり、プロット立て、原稿募集、資料収集、原稿の推敲、レイアウトへと進み、20回程の瞬く間の編纂作業であった。稚拙な部分の避けられないことにはご理解願いたい。

校区の有志、各種団体の投稿協力および東陵中学校、鷹丘小学校には貴重な資料の提供など、校区内各所のイラストでは平田一彦さんのご協力をいただきました。誌上を借りて厚くお礼申し上げます。

2006年8月 鷹丘校区史編集委員会



鷹丘校区史編集実行委員

編集委員

委員長 小野 等
委員 高橋 正彦
委員 黒柳 清
委員 鶴澤 庄三

副委員長 鈴木 武和
委員 今泉 潔
委員 加藤 幸一
委員 河邊まゆ美

委員 北澤 国富
委員 土井 智喜【東陵中学校】
委員 山田 篤志【鷹丘小学校】

校区のあゆみ 鷹丘

平成18年12月25日発行

編集 鷹丘校区総代会
鷹丘校区史編集委員会

発行 豊橋市総代会

印刷 株式会社 きょうせい

R2100
古紙配合率100%再生紙を使用しています

PRINTED WITH
SOY INK
Ink of American Soybean Association



2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋